
学校は空の上！？

神羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校は空の上!?

【Nコード】

N2621E

【作者名】

神羅

【あらすじ】

最近、無事に中学校を卒業、受験も合格してのんびりしていた主人公こと影月狼くん。だけどそこに彼の母親が来て狼くんを違う高校へ。その高校はなんと空に浮いていた。これは、そんな高校での彼の高校生活のお話です。

エピソード0 プロローグ（前書き）

懲りずに書いてみました。よかったら読んでください。お願いします。

エピソード0 プロローグ

「待てえええええええ！後はーい！」

「嫌だ！」

えー…始めまして皆さん。俺は今とある先輩から逃げてます。おっと、自己紹介がまだだった。

俺は影月狼。身長は140。昔色々あってもう殆ど伸びない。童顔で色白。同年代の男子と比べると声も高いらしい。

趣味はアニメや漫画。特技は…あんまり人には言いたくない。

何でこんなことになってるかというと、…こんな事言ったら頭大丈夫か？とか聞かれそうだけど言おう。色々あって空に浮いてる学校に行くことになって色々あって先輩に追われているんだ。

何？色々の部分が聞きたい？

まあいいや、教えてやるよ。それは昨日の事だった。

エピソード1 高校勝手に決められた

俺はこの前中学校を無事に（猫被りがばれずに）卒業した。んで受験も合格したんだ。

それで学校が始まるまですげえ暇だったから昨日8時に寝ちゃったんだよ。

んで、昨日8時に寝た俺は、朝の3時半という微妙な時間に起きた。

「やっぱ暇だ…」

そう、暇だ。とても暇。

ピンポオン。

インターフォンがなった。

誰だよこんな時間に。

「こんな時間に誰ですか？」

「久しぶりだな。息子よ」

「…お袋」

はあ…厄介な人が来たよ。

世界で凄く強い主婦のランキングに間違いなく三本指には入るであろう最強のお袋。

「何の用？」

「一つだけ伝えなきゃならない事が有ってな」

この人のことだ…。どうせろくな事じゃないだろうな。おふくろ

「今日の7時位に迎えが来る事になっている。お前はそれについて行ってその学校に入ることになっている。受験した高校の事は気にするな。連絡済だ」

「それは絶対なんだろ？」

「ああ、絶対だな。確定事項だ」

こうなったら俺には止められない。そういう人なんだ、俺のお袋は。
「なに、気にするな。とても良い学校だぞ。それでは私はこれで行くよ。ダーリンが待つてるからな」
「もう帰ってくんない！」

約、四時間後。

お袋が言ったとおり、本当に何か来た。

「えゝゝとりあえず貴方誰ですか？」

「わしは校長じゃ。ゝほれ、制服と登校に必要なブースターじゃ。

これはかのミスターサンが愛用したといわれるブースターじゃ」

「ブースターってゝ学校どこにあるんですか？」

「空じゃ」

「空ですか」

ああゝ平凡な学園生活ゝさようなら。

出来れば普通に過ごしたかったゝ。

「それじゃあそういう事で。明日入学式じゃから8時までに準備を整えておくように」

「8時までですか。分かりました」

「7時50分には迎えに来るからな。それじゃあまた明日」

「また明日」

ゝ何者だっただんだ？あの校長。

本名乗らないし、何も無いところから俺のブースター取り出してるし、ミスタータンとか軽く危ない発言してるしゝ。

ま、お袋の関係者にまともな人はいないからしょうがないか。

えーと、制服に皺が出来ないようにハンガーにかけて、ブースターはまあゝテーブルの上にも置いておくかゝ。

今日は日曜日。今の時間は8時1分前。

そろそろ奴が来る頃…。よし、窓を開けよう。

「ろおおー！朝飯食いに来たぜえ！」

前もって開けておいた窓から箸とお椀を持って飛び込んでくる奴は、俺よりも一つ上の斎藤^{さいとうようすけ} 葉介^{はけい}って人。一人暮らしで俺と同じくヲタク。だがかなり整った顔立ちで、女子には人気がある。身長は185位かな。羨ましいぜ葉兄、俺なんか140…。

何故朝飯を食いに来るかというと、彼曰く、『お前の家事スキルはA+級だからだ！』だそう。ちなみにこの人、窓を開けておかないと飛び蹴りで窓ぶち破ってまで侵入してくる。三回ほど窓をやられた為、俺はもう諦めて食わせることにしている。

「はいはい…。ほら葉兄、ふりかけとインスタント味噌汁」

「わーい。今日はのり まだ…。って違うっ！おかず！手料理プリーズ！」

「面倒だから作ってない」

「何iiiiiii!？」

「そういう事で。ほら、出口はあっちだよ」

「…そんな…俺は一体何を食えばいいんだ？ってあっちの部屋にある皿は何じゃあ!？」

「…ちつ」

「はいそこお！あからさまに舌打ちするのは止めなさい！」
ええい、朝から五月蠅い奴だ。

「…んお？何だ、お前も俺と同じ学校来んのか」

テーブルの上にあるブースターに気づき、言ってきた。

「え？葉兄も同じ学校なの？」

「おう。あそこは大変だぞ。楽しいけどな」

苦笑しながら俺に言ってくる。

「朝飯はまあいいや。じゃ、俺は帰ってスパボOGやってるわ。またなあ」

「うん、また」

さて、疲れる人はどうか行ったし。

とりあえず食材の買出しとシャーペンでも買いに行くか。

まずはシャーペン。実は俺の家を出てすぐに、商店街がある。

面倒だからそこで適当なのを買おうと思う。

さてさて、財布持ってレッツ買出し！

…と家を出てみたものの、良いシャーペンを求めてその辺をふらふらしてたらスタッフロールにチンピラAとかBとか、そんな感じで出てくる不良どもに囲まれちゃった訳でして。

「…ちつ、メンドクせえ…」

逃げる事も出来るけどこういう奴に限って『てめえ！あの時の！』とか言つてまた出て来るんだよなあ。ま、人目の無いところに行ったらお袋直伝、影月流の拳を食らわせてやるけども。

…あ、言つてなかったな。俺の特技は影月流だ。もう一つあるけど。なーんて説明してる内に路地裏ですとも。

「おいガキ、金くれや。俺達今金欠だよお」

「おとなしく出しゃ痛い目に遭わなくてすむぜえ？」

「うるせーよ。黙れバカ」

「ああ！？てめえ調子に乗んな！」

チンピラA…茶髪が殴りかかってきた。が、お袋の地獄の特訓により鍛えられた俺には当たっても大したダメージにはならんで当たってやる。

こうすれば正当防衛が認められるから。

「ハッ。殴ったな？じゃあ殴られても文句は言えないよな？」

俺は一步で相手の懐に入り、相手の鳩尾に肘を入れる。

「…ぐえ…」

Aは腹押さえて蹲っている。

「一発でお終いかよ」

このやりとりを傍で見ていたB、C、Dは蹲っているAを拾って逃

げていった。

お、Aの財布見つけ。今日はこれでパーっとやるか。

「ただいまっ」と

Aの財布で大量の食材を買い込んだ俺は、昼過ぎに家に戻った。誰もいない家に向かったたぐいまいまと言うのはもはや習慣となつていたのでつつこまないで欲しい。

「おう、おけーりー」

何か居たあああ！

まあ、いいか。どうせ居ても葉兄だからな。

「で、何で居るの葉兄？」

「昼飯食いに来たら居なかったからそのままここでゲームしてた」
「なるほど、とりあえず帰れ」

「腹減つて動けませ〜ん」

テレビの前でだら〜つと横になる葉兄。

「そつだ葉兄、聞きたい事あるんだけどいいかな？」

「おう。いいぜー」

「葉兄の時も校長来てブースター渡されたの？」

「ああ、そうだぞ。あの校長身体能力と成績がそれなりに良けりや不良だろうが強制連行してくるし。ま、あまりにも悪い奴らだったら連れて来ないみたいけど」

ふむふむ、要するに不良も居るのか。

なるほどなるほど…と考えてたらもう一言。

「それでも訳ありなら不良も連れてくるらしい。要するにあれだ、中身も見てから連れて来るか連れて来ないか決めてるんだよ」

「へえ…」

「ぶつちやけた話、そういう奴は殆どいねえけど」

「いないんかい」

やべえ、思わずつつこんじまった。

「っはあ…、腹減つた…」

気がつけば晩飯の準備を始めるのに丁度いい時間になっていた。

「さあてと、今から晩飯作るかな。茶碗持ってきなよ葉兄」

「おう？マジか？じゃ、取って来るとするか」

立ち上がり、窓から出て行った。

「はあ…ま、葉兄が言うならそれなりにはいい学校なのかな」

ま、どうせ猫被って三年間過ごすんだけどね。

さてと、今日の晩飯はすき焼きだ。

とりあえず何が起きてもいい様に体力だけはつけておこうと思う。

エピソード2 学校は本当に空の上

ピピピピッ！

ピピピピッ！

ピピピピッ！

朝か…。俺は目をつつすら開けて時計を見る。

現在、6時。

…うん、朝飯食わなくていいや二度寝しよ。

目覚ましを止め、素早くアラームを7時30分に設定しなおす。

よし、二度寝…

「ろーう！あつさ飯ー！」

出来なかった。

「……葉…兄？」

「朝飯…まだか？」

あーうるせー。

「朝飯は作らないよ」

俺は自室から出て直接葉兄に言った。

「またか…どうしたんだよ。最近飯作らないじゃんか」

「めんどい」

俺は財布から三百円取り出す。

「ほら葉兄。コンビ二行つてらっしゃい」

「いや、いい。とりあえずほら、制服着ろ」

「制服う？…ああ、あれね」

そつ、今日は学校とやらの入学式らしい。

…迎えを寄越すって言つてなかったか？

「迎えって葉兄なの？」

「おう、昨日電話で明日狼を連れて来てくれって言われてな」
制服をタンスから出して着る。

ダサくもないし凄くかつこいい訳でもない普通の制服だ。

「そのついでに朝飯を頂こうかな〜」と思いまして」

制服を着ながら気付いた。

葉兄の制服ちよつと違うなあって。

「ねえ葉兄。何で制服ちよつと違うの？」

「これか？学校行つて校長の話聞けば分かるよ」

「へえ。…よし、着替えたよ」

「そうか。じゃ、早いけど行くか？」

「そうだね。このブースターにも慣れなきゃいけないし」

そして場所は変わって家の裏庭。

「ブースターは背負うだけでいいんだ。で背負ったら右側のボタンを押す」

言われた通りにやってみた。

あ、意外と軽い、これ。

「見る」

葉兄は手鏡を見せてくれた。

「え？何で映ってないの？」

「ステルス機能搭載だ。これで周りの人に気付かれずに登校できる。そして…」

ごそごそと葉兄もブースターを着用した。

「同じものを使っている人同士は見える。狼、外してみる」

言われるままにブースターを外した。その瞬間、

「うおっ」

ふっ、と葉兄の体が見えなくなった。

「着けてみ」

「おお」

今度はぱつと体が見えるようになった。

「そういうことだ。ちなみに、一回外すともう一度ボタンを押す必要あるからな。気をつける。本当はステルス状態でボタンを押すと

飛ぶんだけど、まあジャンプすれば勝手に飛ぶんだよ。飛ぶ速さを変えたかったら左にあるダイヤルをいじれば変えられる」

「なるほど」

「ちなみに、女子の場合はこれらの機能＋スカートの中が他人に見えない、という機能が追加されている。さらにもう一つ、飛んでいる最中にあのく何つの？噴射口？に触れても火傷しないという機能があるぞ」

「…凄いね」

「説明は終わりにしていくか」

「分かった。行こう」

葉兄がジャンプしてそのまま浮遊する。

それをまねして俺も飛んでみた。

「おお。飛んでる」

「後は真っ直ぐに立つとそのまま上昇、体を斜めに傾けたりすれば傾いた方向に向かって飛ぶから。…ってか慣れる、行くぞ」

葉兄は俺をおいて一人で斜め上に飛んでいく。

俺はそれを後ろから追いかけた。

最初の頃こそ姿勢制御とかでフラフラしてたけど慣れれば結構楽しいもんだ。

今は葉兄と並んで飛んでいる。

「何か葉兄の奴僕のと少し違うない？」

追いついて並んで飛行してたらふと気がついた。

「あーこれ？これも校長の話聞けば分かる」

「へえ…。まあいいや。それより後どれ位で学校に着くのか？」

「もうちよつとだな。そんなに早く行きたいのか？」

「折角だから色々見てみたいじゃん」

「よし分かった。あんま動くなよお」

俺の左側に接近してくる葉兄。

何してるんだ？

「あつたあつた。よつと…」

ん？なにやらカチカチと何かを回している音が…

《これより、高速飛行を開始する。

これより高速飛行を開始する。

モードチェンジ、開始》

機械音が…機械音が！一体何をしたあ！葉兄いいい！

ガキョガキョガキョ

ガシン

《ハイスピードモードへシフト完了》

キイイイイン…ボツ！

うお…一気に加速した！

「葉兄！葉兄、止、め、ろおおおおお！」

「あつはははははは！！！」

下から葉兄も俺を追ってくる。…爆笑しながらくつそ。後で突き落としてやろうか。

あ…、あまりの加速力で物凄いGが…

ぶっちゃけきつい。

「追ーいつーいた。今止めてやるぞー」

また後ろからカチカチいつてる。

ふう、助かった。

ガチャガチャ

ガタン

《ノーマルモードへシフト完了》

「ふう…。葉兄い、あの事おじさんに言うよ?」

「ごめん、ゆるちて」

「まあいいけどね」

「それより、今の加速のおかげでもう学校見えるぞ?」

ほら、って斜め前を指差す葉兄。

俺はその方向を見た。

「…大きさがおかしくないか?あれ」

そう、ありえない位でかい校門があった。

「気にすんな。ほら、さっさと行こうぜ」

「そうだね」

それからすぐに校門近くには着いたけども、一つ忘れてることがあった。

それは、

「葉兄、どうやって着地すんの?」

着地の方法。

「体重を下に掛ければ降りられるぞー」

「分かった。やってみる」

ゆっくりと下降し始めた。

おお、出来た。

「おし。じゃ俺は自分のクラスに行くわ。またなあ」

葉兄は手を振りながら歩いて行った。

俺も行くでしょう。

とりあえず真っ直ぐ行きや入り口があるかな。

よし、行くか。

ま…迷った…

真っ直ぐ行けば入り口あるだろー、とかそんなノリで動くんじゃないかな…

はあ、どうすっかなあ。

辺りを見回してみた。

お、右の方に誰がいるぞ。ちょっと聞いてみるか。

「すいませーん」

歩きながら声を掛けてみた。

「はい？どうかしましたか？」

こちらの方を向き、言ってきた。

…あれ？何か聞き覚えのある声だな。

「私に何か用ですか？」

むこうも近づいてきた。

顔がハッキリと分かるくらいまで近づいて気付いた。

「もしかして…『先輩』？」

「何だ、『後輩』か。久しぶりだな、元気か？」

彼女は夜波風菜。よなみふうな

腰辺りまで伸びた黒髪。可愛い、と言うよりも綺麗、と言ったほうがいい綺麗に整った顔立ち。スタイル抜群。長身。成績優秀。運動神経抜群。

中学校時代、俺の猫被りを唯一見破った人だ。

俺も先輩の猫被りを見破ったけどな。

「道に迷ったんです。教えてください、先輩」

「その言い方は似合わないよ。どうせ他人はいないんだから普通に

「話せ」

「はいはい……。で、マジで迷ったんだけどどこ行きゃいいんだ？それと、まだ猫被ってるのか？」

「後輩だつて猫被っているだろう。とりあえずついて来い。体育館に行くぞ」

俺を置いてさつさと歩き出す先輩。

うん、行動が早いのは変わってないなあ。

少し歩くと、人がポツポツと道に現れ始めた。

それすなわち、俺と先輩が猫被るということ！

「ところで先輩。何であんな所にいたんですか？」

「私はちよつと早く学校に着いたから散歩してたの」

「そうなんですか。それより先輩、この学校って大きすぎだと思いませんか？」

「ふふふ。一週間もすれば慣れるわよ。

はい、ここが体育館。あそこの壁にクラス表と新入生のこの後の行動が掲示されているから、また後で会いましょう」

「ありがとうございます、先輩」

先輩は猫被ったまんまどつかへ行った。

俺もクラス確認して、さつさと行くか。

誰か知ってる奴いねーかなあ。

とりあえず見てみるか。

一年一組 A・B

俺の名前は無し、と。

二組 A 無し。 B 無し。

三組 A 無し。 B …お、あつた。

知ってる奴誰もいねえなあ。

ま、いいか。

俺は今後の予定を確認し、ご自由にお取り下さいの所から地図を持って、一年の校舎に向かった。

エピソード3 先生はチョークを投げる

地図を見ながらのんびりと歩いて、五分くらいで自分のクラスに到着した。

「一年三組 B。ここか」

さて、どんな奴らがいるんだろうな。

俺は教室の中に入った。けど、まだ誰もいなかった。

ま、仕方ないか。まだ7時20分だし。

黒板に貼ってある座席表をでも見るか。

『早く来た人から好きな所に名前を書いてください。そこが貴方の席になります』

よし。窓際後ろの席でゆっくり待つとしよう。

五分後。

「誰も来ねえな」

まだ五分しか経ってないしな。

更に十五分後。

「Z Z Z…Z Z Z…」

【寝とるし！】

（ は作者ツッコミです ）

そして三分後。

「三組のB…ここか」

「Z Z Z…Z Z Z…」

「誰かいないかな。って、いるけど寝てる！」

うるせえな…けど猫被らなきゃ…

「誰かは分かりませんが僕の睡眠の邪魔をしないでください…」

「おいつす！始めまして！」

うわぁ…俺の話聞いちゃいねえ…

つか、声聞いた感じじゃ女子だと思う。

俺は顔を上げてみた。

「あ、やつと見てくれた。始めまして、私は奈々村美咲。ななむらみさき 宜しくね」

テンション高けーなおい…。つか結構可愛いと思う。

「君の名前は？」

「僕の名前は狼。影月狼だよ。僕のほうこそ宜しく」

とびつきの笑顔（勿論作り笑いだ）で名乗っておく。猫被りは第一印象が大事なんだぞ。

「…う、うん。ねえ狼君」

何で顔赤いんだ？

「あの…席、隣で…いいかな？」

隣？何でわざわざ…。まだ空席はあるのに。

「ごめん。隣は男子がいいんだ」

その方が話が合うだろうしなあ。

「…そっかぁ。まあいいや、じゃまた後でね狼君」

そう言つて、奈々村は残念そうな顔でクラスから出て行った。

「おや、先客がいたか。俺が一番だと思つてたのに」

すぐにもう一人来たし。今度は男か。

「俺は筒井つついけん 見つて言つんだ。趣味は人間観察だ。宜しく」

「影月狼だよ。宜しく」

オイオイ、趣味が人間観察つてお前…

「じゃ俺はお前の隣の席をいただく」

それから暫くは二人で世間話をして時間を潰していた。

キーン コーン カーン コーン

「気がつけば他のクラスメートが来てるな」

予鈴が鳴った今では、名前は知らんがクラスメート達がいっぱいい

る。

「そりゃあ初日から遅刻する人なんてそうはいないよ」

「それもそうだな」

後、話をしていた気がした。見には猫被りを見破られてない事が、
ふ、俺の猫被りも上手くなったな…。

キーン コーン カーン コーン

…あ、本鈴だ。

ガラガラッ

「おい、皆一席に座れ！。これからHR始めるぞー」
俺はアイ・コンタクトを見に送った。

（ごめん、寝るから後で重要なこと教えて）

（早速寝るんかい！でも寝てるときにチヨーク投げ来るかもよ？）

（何それ！？）

（俺の鍛え抜かれた人間観察眼が『あの先生チヨーク投げそうだな』
って言ってる）

（へえ。まあいいや。じゃ、おやすみ）

（了解）

~~~~~

「俺の名前は鮮血せんけつしんく 深紅だ。一応ここの担任なんで宜しく。ちなみに、俺の授業で寝てる奴、遅刻した奴、赤点取った奴は問答無用で俺のチヨーク投げが炸裂するぞ。覚悟しておけ」  
本当に投げんのか…。それに覚悟ってオイ…。

…って、初の俺視点か！皆さん、俺です、見ですよ！

「先生、チヨーク投げって覚悟するほどの物でしたっけ？」

ナイスな質問だな、クラスメイトN。

「この学校の教師になるにはチヨーク投げが常人よりも強くなきゃいけないんだ。んで、校内ランキングがあるんだが、俺はその中の四位だ。実力は…そうだな、遅刻してる奴がいるからそいつが来たら…ってもう来たな」

うおおい！この学校って皆チヨーク投げんの！？

「ちゅーこーくーだー!!!」

ああ……早速一人が餌食に……。

「言うよりも狼、初日から遅刻してる奴いたぞ？」

「よし、入ってきたら投げるからよく見とけよ」

ガラガラッ！

「到着！」

「遅刻してんじゃねえ！喰らえおらあ！」

ヒュッ！

パァン！

「ゴアツ！」

うおおおおお おおおい!!!

どんな！？どんな破壊力！？

あいつ頭から血出てるよ！

「と、まあこんなもんだ。ちなみに、これはまだ全力じゃないからな。授業で寝た奴には全力のチヨークが飛んでいくぞ、分かったか？」

あれで全力じゃないのかい！？

「はい」×クラスメイト40人分

「それで、今ここで氣い失つてゐる馬鹿は……そうだな、筒井とか言う」

の、お前の前に座らせといてくれ」

「あ…はい、分かりました」

めんどくさいなあ…仕方ない、運ぶか。

…ん？俺が動いたら狼が寝てんのバレンじゃね？

まあ、いいか。

よし、移動完了つと。

「おゝし、今後の予定を確認するぞー。この後はまず…何だあ？あいつ寝てるのか？つたく、しょうがねえなあ。ま、初回だし八割くらいでいいか」

あゝ…狼が餌食に…。

皆も先生の八割（くらい）の力を見るためにめっちゃ見てるしなあ…。

狼、ドンマイ！

~~~~~

「起きろやあああ！死ねえええ！」

ヒョオオン！

パシッ！

んあ…？何で俺の手に…チヨークが…？

「？…おはよ……見。何で…僕はチヨークを持つてるの？」

「おい…マジか…？」

マジかって何がだよ。

「おゝ、俺のチヨークをキャッチするかあ。中々面白い新生だ」
あらま、先生本当にチヨーク投げするんだ。

「まあいい。話を進めるぞー」

あの後、真紅先生の話でこの学校がいかに関特殊なのかが分かった。

まず一つ目。

この学校はポイント制らしい。
主に学校行事で活躍、ランクの高いテストを受けて好成绩を取る、後はまあ、アレだ。普段の生活態度が良いとポイントがもらえるらしい。

で、そのポイントを使うと制服を改造できるようになったりブースターを改造できるようになったり、成績よく出来たり…その気になつてアホみたいに溜めれば飛び級も出来るとか。
ま、他にも色々あるみたいだけど。

二つ目。

『報酬』制度。

どうにもポイントだけじゃ盛り上がらないらしくて、その時の校長の気分によってイベントの上位何名かに報酬が出るらしい。
噂じゃ気分がいい時は最新式のパソコン三台とか液晶テレビとか出るみたい。

三つ目。

イベントはテスト、体育祭とか以外にもあるみたいだけど、完璧校長の気まぐれらしい。

で、夏休みとかそういう長期休校とかでもやる時はあるみたいで、こっちは参加不参加自由だけど普通に授業のある日にイベント発生したら全員強制参加。勿論授業は潰れるから俺としては嬉しいけど。

基本はこの三つ。だけど自分に自身がある人はこんなこともいいらしい。

四つ目。

授業はサボっても良い。しかし、担任の先生と戦い、勝つこと。
(もしくは逃げ切ること)

この時のみ先生は特殊能力つばいのを使うことが許可される。
普通にサボってもいいけど先生に見つかったら即刻戦闘になる。

「俺に勝てるならサボってもいいぞ。」By真紅

以上がこの学校の特徴だ。

あ、もう一つあった。校門より内側に入るとブースターは勝手に消えて、校門より外側に行くと足下に出るようになってる。

…で、早速一年生のみイベントが開始されるわけだ。
何でも、

『入学式めんどろじやから早速イベントじゃ!』
とかこんな感じでイベントが開催が決まったわけだ。
うん…後で校長殴つとくか。

ま、報酬が早速いいもんだから良いんだけどね
そんじゃま、ちよいと頑張りますか。

エピソード4 サバゲーが始まった

…で、結局何のイベントかつつと。

サバゲー（サバイバルゲーム）だった。

ルールはいたって簡単。

一年全員は体のどこかに的っぽいのを三つつけている。それを探して壊すだけ。

殴り合いで怪我までならOK。殺しは駄目。

上位八名には豪華商品がでるそう。

と言う事で、イベントスタート

『よいかあ一年生諸君！それではこれより三分後に開始する！それまでに自分もどこかに隠れるなりするのじゃ！移動範囲は一年校舎の中とグラウンド！それと裏庭じゃあ！』

「うおおおおおお！！！」×いっぱい。

おーおー、皆さんやる気ですねえ。

さて、俺も隠れるとするかあ。

『言い忘れつつだが、そこらじゅう罠だらけじゃから気を付けるように。女子には発動しないから女子は安心せい。失格になったら一年校舎入り口に来るように。皆のものお！豪華商品を目指してがんばるがよいわあ！』

男女差別！？

何で男子だけ罠あるんだよボケ校長が！

『スタート!』

「じゃあな狼。俺は隠れるとするよ」

「お互い頑張ろうか」

「ああ、そうだな」

じゃーなーって言いながら見は走り去っていった。

さて、俺も…

『影月ろおおー!死いねえええ!』

何でさ!?

「何で!?!何で皆して僕を狙ってるの!?!」

『それはああ!貴様が奈々村さんの頼みを断ったからだあ!そんなことは俺達ファンクラブがゆるさなあい!』

「何時の間にそんなクラブが出来たんだよ!?!」

(ついさっき紙回してたぞ。内容は影月をやらないか、だった)

見!?!どこから伝えてんの!?!っていうか何それ!?

(まあ、頑張れよ。ちなみに俺はファンクラブに入っていないからな。じゃ)

『諦めて殴られるおお!』

「嫌だ!」

何か偉そうな奴が出てきた。

「皆あ!ヤレエ!」

『オオオオオオオオオオ!』

皆無駄に足速え!

本当に運動神経良い奴だけ集めてんのかよ!

あーもー、めんどくせー。

1・たたかう。

2・すなおになぐられる。

3・ほんきでぶつとばす。

4．にげる。

うん、迷わず4だな。

「じゃあね！フアンクラブの皆さん！」

俺は跳んで逃げた。裏庭の方に。

俺という共通の敵を見失ったあいつ等はその場で乱闘を始めた。皆さんかなり本気で。

『校長じゃ。また一ついい忘れとった。二年生からの頼みで二年のトップ八名が参加しておる。お主らの実力じゃ倒せないと思うがそこら辺はコンビプレイで倒すのじゃぞ。まあ倒せなきゃ報酬は皆二年生の物になるだけじゃがな！ハハハハハ！』

二年のトップ？…嫌な予感が…。

つか校長。マジでぶん殴るぞてめえ。

裏庭到着〜っと。

ピーピー

「！」

ピッチングマシンか！

おおよそ150キロくらいの球が飛んで来た。

まあ、それがどうしたって感じだけだな。

「ほっ」

ベシッ！

ゴンッ！

蹴り返した球がマシンに直撃。

うむ、我ながら素晴らしいコントロールだ。

パチ、パチ、パチ、パチ

「よくぞここまで辿り着いた」

「誰です？」

「喜ぶんだな。このNo.5、斎藤葉介が自ら相手になってやろう」

「なんだ、葉兄か。っていうかその台詞はD.I様の台詞だよな」

「狼、その通りだ。D.O様カッコいいよな。」

それとはかく、俺の報酬の為に死んでくれッ！」

言い終わる前にもう走り出してた。

まずは…様子見だな。

「オラッ！」

勢いを殺さずに跳び蹴りしてきた。真っ直ぐに。

「はっ」

こんなん体を捻りゃ動かなくても避けれるぞ？

「甘いつ！」

「！？」

空中で向きを変えやがった！？

何でだ？まあいい。

とりあえず後ろから蹴られ、前に飛ばされたからそのまま転がって距離をとる。

幸い、ターゲットは壊されなかった様だ。

「葉兄、何？今の」

「教えるかよっ！」

また走り出す葉兄。

「ふーん…。ま、いいや」

「もっぱつ喰らえ！」

また跳び蹴りしてきた。

関係ない。ただ正面から反撃してやればいい。

「遅いよ…葉兄？」

パパパン！

「…………え？」

「残念でした。僕には勝てないよ」

俺に言われてから制服を見る葉兄。

「全部…割れとるッ!？」

「じゃあね、葉兄。僕とやるならもうちょっと強くなってからね」

「Nooooooooooo!? 狼に負けたああ!」

うーん、それにしても。

すげえいい景色だ。

…………え?どこにいたって?

それは、裏庭の一番デカイ木の枝。

いやぁいい所だ。

周りが良く見えるし何よりも見つかりにくいし。

グラウンドの方もまだ乱闘してるっぽいし、ちよつと寝るかな。

その頃のグラウンド。

ワーワー！

せ、戦友ー！

俺はいいからお前だけでも生き残れ！

すまん！恩にきる！

「おゝおゝ。面白そうなことしてるじゃないか」

「私も！混ぜろおおおお！」

二年生N03到着。乱闘開始。

数分後。

「Zzz…。ん、何だ？もう乱闘が終わったのか？」

さっきまで騒がしかったグラウンドが静かになっている。

「つかしーな。もう暫く続くと思ってたんだけどな」

枝の上で軽く体操。：うん、快調快調。

「ま、行ってみつか」

木の枝から一年校舎屋上へとジャンプ。

で、そのまま校舎を通って教室の窓から出てグラウンドへ。

何故屋上から飛び降りないかって？

目立つちゃうじゃん。

『校長じゃよゝん。たった今残りが30人になったぞ。あと少しじやから頑張れ』

「ハア…一年生もまだまだ弱いね」

乱闘後のグラウンドに誰がいる。

多分二年生だろうな。

「何だ、まだいたのか。お前は私を楽しませてくれるか？」

「知りませんよそんなの」

「行くぞ！」

身構える二年生。

「面倒なんでちよつと本気でいきますよー」

そうだな、2 / 10 って位でいいか？

「ほい」

パパパアン！

「なっ！？」

「残念でした。失格です」

さてさて…色々聞かれる前に逃げますか。

『一年生諸君。面白いことに一年生の影月君が二年生を倒してまわつとるぞ。このまま行けば報酬が残る可能性もあるぞ。という事で頑張るのじゃー。…ズズズズ。あちー！教頭！このお茶熱すぎっ！』

この放送がなつてゐる間にも四人ほど失格にしたんだけどねー。

『あ、残りは10人じゃぞー』

「あと二人か。さくつとやるかね」

「ほう。私をさくつとやれると思っていたのか、後輩は。舐められたものだ」

……うげ、この声は…。

「それなら本気でやってもいいだろう。な、後輩？」

「…………サイナラ」

逃げるが勝ちだ！

この人恐ろしいんだぜ？中学の時一回【ピ】 【されかけたことがあるもん。】

「待てええ後輩！止まらなないと【ポー】とか【ピー】するぞ！」

良い子の皆さんはかつこの中は知らなくていいんだよ

BY作者

「そんな事されると分かって止まる奴はいない！」
今俺は常人では着いて来れない筈の速さで走ってる。

だけど先輩は常人じゃないから俺について来れるわけで。

「逃がさないぞ後輩！」

でもって、決定的なこと。

俺は氣に入った人には全力を出せないんだ。

何でだろう？体質かな？

先輩はむしろ、俺を弄る時にしか本氣が出ないらしい。
だからあ、逃げるしかないのさっ！

「来るなあああ！」

「さあ私と一緒に大人の世界へ踏み込もう！後輩！」

「嫌だああああああ！」

扉を開いたらそこは屋上だった。

…屋上？

「逃げ道がねええ！？」

「追ーいつーいた」

どうする…どうする？俺！

捕まったら確実に【ピ】だ！

でも逃げ道が無い！

「さあ…覚悟はいいか？後輩」

ゆらりゆらりと一歩ずつ近づいてくる先輩。

あ…一っだけ逃げ道が！

「行くしかない！」

俺はフェンスを飛び越えた。

「ハハハハハ！サイナラ先輩！」

「…あ。その下女子更衣室で二年生が生着替え中」

「何ですとおおおおおお！？」

うおおおおお！ 掴め！ 掴むんだ俺！ フェンスを掴めええ！
掴めなきや 高校生活が大変なことにいい！

ガシッ！

「セーフ…」

「だと思っているのか？ 後輩」
上を見るとそこには先輩がいました。

「ドチクシヨオオオ！」

右手に力を入れて一気にフェンスの上へ。
そしてそのままフェンスの上を走って加速。
んでもって裏庭に向かってジャンプ。

「俺は鳥になるっ！」

…ふ、今度こそ逃げ切っただろ。

「クッ、逃がしたか…」

『そこまでじゃっ！』

『たった今、残りが八人になった。よって終了じゃ。今から一年校舎入り口に集まるのじゃ』

「よし、皆集まったな？」

今ここには俺含む八名の勝者が集まっている。
名前が分かるのは見と先輩だけ。

後は知らん。

「お待ちかねボーナスタイムじゃ。この箱に入ってる棒のどれを引くかは君達で決めてくれ」

「まあどれでもいいんじゃない？ 俺はこれ〜っと」

一人が決めたら皆もそれぞれに選び始めた。
中にはじゃんけんで決めてる奴らもいる。

「狼。お前は選ばないのか？」

誰だ？って何だ、見か。

「僕は余り物で結構」

「そうか。じゃ、俺も決めてくるとする」

〃〃数分後〃〃

「よし、じゃ一斉に抜くがよい。交換はしたかったら自由にするの
じゃ。報酬は今日の夜にそれぞれの家に届けておくぞ。それじゃわ
しはこれで」

『せーのっ！』

「お、俺は高級ソファーだったぞ。お前は？」

「今見るところ」

…お、先に何か書いてあるぞ？

どれどれ…。

『魔剣ダーイン・スレイヴ』

「……………」

「……………」

「何で魔剣？」

「知らないよ」

「……………」

「……………」

「教室戻るか」

「だね」

教室。

「皆分かったか？イベントつつのはあんな感じだからな。イベントは本当に校長の気分で作るから普段から体を鍛えるのもいいぞ。ちなみに、体育の授業ではイベント盛り上げる為に地獄のようなトレーニングやるらしいぞ」

わざわざトレーニングするんかい。

まあいいか。

「いいのか？」

「あれ？僕声出てた？」

「いや、そんな感じがしたから言ってみた」

「おら、皆立て。今日はこれで終わりだ。明日遅刻すんなよ。礼」

礼をして教室から出て行く我らが先生、真紅先生。皆もそれぞれが帰る準備をしている。勿論、俺も。

「じゃあね、見。また明日」

「おう、じゃな狼。また明日」

ああ、今日は先輩から逃げるので疲れたな。帰ってのんびりするでしょう。

エピソード4 サバゲーが始まった（後書き）

作 どうも、今回から後書きを書こうと思います。

狼 今回からって何だよ。

作 そのまんまだよ？それにしても大変な先輩を持ったね狼くん。
狼 全くだ。あの人は加減してもんを知らない。俺に対してだけ。

作 それは置いといて。最初のイベント、楽しんで頂けたでしょうか？

狼 誤字、脱字等があったら感想とかで教えてやってくれ。…あ、
つまらなかったらつまらないって言ってやってくれ。

作 その場合、頑張っって皆さんに楽しんでいただけるものを書こう
と思っております。

作&狼 それでは、感想、評価を待ってまーす（待ってるぞ）

エピソード5 生徒会に誘われたような誘われなかったような……

あ、どもども。狼です。

俺は今、またしても面倒な事に巻き込まれています。

それは、我らが先生、真紅がめっさチョーク投げてくるんですよ。
何でかって？それは……

～一時間前～

「……ん……」

ふぁ～……よく寝た。

お、今日は目覚ましが鳴る前に起きたか。
微妙に嬉しい。

……………何ですががしい筈の朝に魔剣が有るんだろうなあ。
黒いし、カタカタしてるし、何かあきらかに封印っぽいのである
し……

ま、持ってみるか。

チキッ！

お、結構軽い。中々いいじゃねーk……

>>チ……チヲ……ヨコセ……<<

「うおお！？」

急げ！片付けろ！確かに魔剣だぜこりゃあ！
俺はすぐに自室の片隅に片付けた。

「よし、とりあえず朝飯を作るかあ」

〈数分後〉

あれ？そついや昼飯ってどうすんだろ？

弁当かな？それともポイントを使って買うのか？
弁当でいいか。

〈更に数分後〉

「ご馳走様でした」

よし、弁当も作ったし、着替えて行くか。

自室へ着替えに行く俺。部屋の片隅でカタカタしてるのはあえて気にしない方向で。

「よし、行こう」

〈現在〉

で、途中で弁当持ってきてねえ！って気付いたから戻って取って来たんだがそしたら遅れたと。

「おらあ影月！二日目から遅刻とは何事だ！？オラオラオラオラオラオラオラア！」

前回は俺がキャッチしてしまったらしい（見談）。

今回は数で勝負か。

「無駄です。無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄」

ま、俺は威力を弱めながら全部見に流してるんだけどね。

カツカツカツカツカツカツ……

「ちょ、狼、やめ…痛ッ、マジで…やめて」

次々と見の顔に命中していく弱チヨーク。

一発強チヨーク発射しようかな。

「オラオラオラア！…クッ、これで最後のチヨークか」

「無駄無駄無駄。やつと終わりですか？」

「だから、やめて、痛い」

「最後だ、喰らえ！」

「嫌です」

デコピンで真紅先生にはじき返してみた。（強めに）

「危なっ」

ベコオン！

あらま、教卓壊れちゃった。

「あーあー教卓が…。まあいい、校長に買わせっか。影月、座って

いいぞ」

「はい」

やつと座れる…。

「狼、痛かったぞ」

「いやあ、いなしてたらたまたまそっちへ飛んだだけだよ。わざと

じゃない」

キンコーン カンコーン

「お、チヨーク投げてたら終わっちまったか。起立、礼。終わりー」

「見。次の授業何？」

「数学だな。…それより魔剣だけど、どうだった？」

「あれ？握ると声が聞こえる辺りからして本物じゃないかな」

「ほんとに魔剣なのか。校長はどこで集めてくるんだろうな」

「知らない」

次は数学か…サボる。

「見。僕次の授業サボるから宜しく」

「いいのか？テスト近いらしいぞ？」

へえ、テスト近いんだ。

「どうでもいい。じゃね」

一階の窓から外へ出る。

さて、どこへ行くかね。

その辺探して気に入ったところで寝るか。うん、そうしよう。

と、いうわけで今色んなところ跳び回って探してるんだよ。

裏庭のあの木もいいんだけどな！。

やっぱ色んな所見てみたいじゃん？

……お、いい所見つけ。

着陸つと。

そこはいい場所だった。

小高い丘で、丘の上には木が何本か生えてる。

地面は芝生で寝転がるのにいい。

何故か小鳥や小動物が生息しているが、とてもいい場所だった。

問題は三年校舎が近いことかな。まあいいか。

日なたはさすがに暑いかな。木の陰に入るか。

よし、寝よう。

（三年校舎・生徒会室）

「あら、一年生」

「ふふ、わざわざこんな所まで来るなんて…面白い子ね」

「それに…可愛い。生徒会に無理やり入れちゃおうかしら」

「ウフフフ…」

「Z Z Z…Z Z Z…」

「その君」

「Z Z Z…Z Z Z…」

「おい！君！」

…ん…

誰だよ…まだチャイム鳴ってないだろうが…

「…僕ですか？」

「そう、君」

地味な人だった。

「生徒会に「嫌です」？」

ふ…即答してやったぜ。

「そう。ま、まだ時間はあるし、考えるだけでいいからさ。その内会長が行くと思うから」

何だよ。断ったのにまた来んのかよ。

「それじゃ、俺はこれで」

言うだけ言って帰りやがったよ。

んー…俺も戻るか。

急いだらサボった意味無いからゆっくり歩くでしょう。

それにしても生徒会か…考えても無かったな。

教室

ガラガラッ！

「ただいま戻りました、おっと」

「チッ。不意打ちも駄目か」

「まだまだですね。真紅先生も」

キンコーン カンコーン

「おーし。四限終了。起立、礼」

礼をしてさっさと教室を後にする真紅先生。チヨーク投げの練習でもすんのか？

「狼、お前どこ行つてたんだよ」

「んー、その辺探してたらしい場所があつてそこで寝てた」

「二時間も？」

「うん」

「アホか。勉強しろよ」

「めんどい。それより昼飯だよ」

「そうだな。俺は購買行ってくる」

「ん、ここで待ってる」

「お前は買いに行かないのか？」

「弁当作つてある」

「……………」

「見？どうしたの？」

「食われてるぞ、お前の弁当」

「え？」

俺は後ろを見てみた。

おう、なるほど。

あれは先輩だな？

「先輩！何俺の弁当食つてんすか！」

「もぐもぐ…ごくん…それは私が先輩だから！」

「意味が分からないです！」

あ、俺の弁当箱が空に…。

そしてゆらりと立ち上がった。

「さあ後輩。昨日の続きと行こうか」

「嫌ですうううう！」

「逃がさないぞおおおお！」

俺と先輩は走り出した。

「よく分からんが頑張れよ！」

俺がこの後昼休みが終わるまで逃げ続けたのは言ってもない。

エピソード5 生徒会に誘われたような誘われなかったような…（後書き）

作 学校はどうだい？狼くん。

狼 先輩がいなきやいいんだけどな。

作 こらこら。先輩は敬いなさい。

狼 やだ。

作 そういえば生徒会に誘われてたけど、どうすんの？

狼 入る気は無いな。

作 そうか。

作 さて、最新話を更新しました。今回は若干短いすね。

狼 面白くなきゃ読まなくてもいいんだぞ。

作 こらこら、そういうこと言っていると読者様が離れて行っちゃうですよ。

狼 まあいい。このアホな作者が書いているこの小説を読んでくださってる皆さん。ありがとうございます。

作 誤字脱字や感想、評価を心よりお待ちしております。…あ、後校長にやって欲しいイベントがありましたらメッセージでも感想でもいいので書いてくださいね。

作&狼 それでは、また次話で会いましょう。

エピソード6 全校VS俺！？前編

時は昼休み。場所は最近作られた大食堂。（生徒が増えたから作っ
たらしい）

今、俺はなんと…なんと！

蕎麦食ってます。はい。

ちなみに隣では見がうどん食ってる。

「中々美味しいな」

「そうだね」

ずるずるー、と二人して麺をすする。うむ、平和だ。

昨日は持ってきた弁当を食われ、なおかつ先輩に追われるという最強コンボをくらったからな。もう弁当は持つてこないと誓った。自分。

「それにしても大変だな、お前も」

見がうどんを食い終わり、話しかけてきた。

「ん？何が？」

「あの先輩だよ。夜波先輩だっけか？」

「食事中。先輩の話題は禁止」

「そんなにあの人の事嫌いかな？」

うーん…また答えづらい質問を…

「嫌いじゃないけど…」

確かに、嫌いじゃないけども好きか？と聞かれるとどうなんだろう？自分でも分からん。

「好きなのか？」

「どうなんだろう？分からない」

「分からないって自分の事だろ？」

「まあいいじゃん」

俺は食い終わった食器をもって席から立った。

見もついて来た。

「そうだな」

食器を厨房のおばちゃんに渡し、大食堂を後にする。

ポイントを使うのは気に入らないけど美味いから明日もここで食おう。

「…で、そこにいるみたいだが？」

「そうなんだよねえ。どうしようか」

「頑張れ。俺は屋上で高みの見物、とさせてもらつよ」

「…後輩。私の弁当は？」

見がそそくさと横を通って行ってしまった。

「知りませんよ。忘れて来たんでは？」

「違う。私への愛情が詰まった後輩の手作り弁当の事だ」

「弁当は作ってません。後、愛情も入ってないです」

「……そうか」

…おう、いつものゆらゆらとした動き。

…来るな。

俺は逃げる準備をした。

「ならこの科学部の友人特製の新薬を飲むといい！」

今だ！先輩を飛び越えるんだ、俺！

「上！？チツ！」

ギリギリ抜けた。後は走り去るのみ！

「だあれがそんな物飲みますか！」

一気に加速した俺は先輩を引き離す事に成功…

「今の私は弁当を作ってくれなかった後輩への怒りによってパワーアップしている。簡単に逃げれると思うなよ、後輩」

してなかったああああ！

「逃げ切って見せます！」

ずっと全力はさすがに疲れるからスタミナが昼休みの間持つ程度の速さで走った。

（校長室）

「監視カメラきど〜う。今度のイベントは何をしようかの。クラスの代表を決めて逃走中とかもいいかも知れんの」

ブウン

監視カメラが一斉に作動する。

「どれどれ…面白いことは無いかの」

校長は映像を切り替えている。

「おや、影月君か。ヒョッヒョッヒョ。先輩と鬼ごっこか」

校長は少しの間考えた。

今日はこれでいいかのー、と。

「良い事を思いついたぞ」

今度は違うスイッチを押し、マイクのような物をどこから取り出した。

ううおおおおー！！

今日の先輩マジでパワーアップしてるよおおー！！

常人の限界超えてるよおお！

……あ？俺？お袋と親父がアレだから常人じゃないと思うよ。自分で言ってる悲しいけどね。

「待てえええ！そして諦めて私の【ピ】か【ポ】になれええ！」

「どつちもR18指定じゃないっすか！嫌ですよ！」

『全校生徒の諸君！。校長じゃ！。とりあえず自分の上を見てくれるかのー？』

上え？何があるんだよ。

……って俺達が映ってる！？なんで？

『これからまたイベント……っていうか賭け事をしようと思う。影月君が逃げ切れるか捕まってあんな事やこんな事をされるか……。どちらかに自分のポイントを賭けるのじゃ。ポイントカードから賭けることが出来る。なお、夜波君の方に賭けた場合、影月君の妨害をすることが出来る。』

テメー校長ふざけんなああ……！！

後ろで先輩が黒い笑み浮かべてんだよお！

そっという事は次回やれっつーの！

『ちなみに言うと一定数を越えた時点で5・6限がこのイベントに変わる。そっという事で応募をまっとするぞー』

皆応募しないよな？シナイヨナ？

頼むぞー応募するなよー。

『風菜ファンクラブー同おお！全員応募せよおおー！』

『おおおおおおお！！！』

『そしてあのつくき影月狼を捕獲するのだ！！！』

『イエツサアアアア！！！ボスウウ！！』

うああああ！応募する気満々じゃねーかコンチクシヨオオオ！

『あ、そうそう伝え忘れじゃが、賭けに当たった女子は『一日狼君に命令し放題権』を抽選で一命様にプレゼントじゃぞー…おおう、一気に女子の参加率が上昇したぞ』

全校の女性の皆さああん！？

貴方達は鬼ですかああ！？

『と、言うわけで。5・6限は鬼ごっこじゃあ！！』

「ふふふ…絶対絶命じゃないか、後輩」

「チクシヨオオオオオオ！！！！」

エピソード6 全校VS俺！？前編（後書き）

狼 さあああくしやあああ！どこ行きやがったああ！？ぶっ殺ーす！
作 （あぶねーあぶねー。透明マントを親父さんから貰ったって良かったぜ。）

狼 けつ。クソッ！いないのかよ…。

作 （さああどうなるんでしょうねえ？この鬼ごっこ。作者も楽しみです）

作 行っただか…。

はい、今回も短いっすねー。申し訳ありません。

次回は長めにする予定です。そのため、少し時間がかかるかもしれない。ですが、出来る限り早く書こうと思いますのでどうか見捨てないでください。お願いします。

さて、皆さんはどちらが勝つと思いますか？

作者のこの私もまだ決めていません。何せこの小説は作者のノリと気分で出来ているからです。

… あっ！やべっ！狼くん来たっ！

そんなわけで今回はお終いだーす。感想・評価、それと皆さんの賭けの予想を待ってますよおおお……

エピソード7 全校VS俺！？後編

『ルール説明じゃ。夜波君側についた人たちは影月君を夜波君に引き渡す、もしくは夜波君が影月君を捕まえたら勝ちじゃ。影月君側の人たちは手出し無用じゃが、6限まで影月君が逃げ切ったら勝ちじゃ』

6限までつつーと残り約二時間か？

あー…だりい…。

「ふふ…私は少し休憩しよう。全校の皆が後輩を追うだろうからな」
「こおの鬼先輩がああ！！逃げ切つてやるからな！！」

全校の皆…。えーと…一年で10クラス×2×40人だから800人だろ？二年も多分同じくらいだろうから800人。三年もやっぱ800人くらいか？

うつわ…2400人も追つてくんのかよ…。

「暫くしたらまた追う。覚悟しておくんだな、後輩」

「もう来んなアホ先輩」

それにしても…

「校長ー。二千五百対一ってのは酷いんじゃないかー？」

『そうじゃな。諸君、追加ルールじゃ。影月君を追えるのは各クラスの代表を二人と、各部活動の部長のみにする。各クラス、話し合いで代表を決めるのじゃ。更に特殊ルール。影月君を夜波君に引き渡したクラス、もしくは部には特別な報酬を出そう』

やっぱ聞いてやがったか。

まあ逃げやすくなったからよしとしよう。

「んじゃ、後二時間逃げ切るとするか」

「数分後、グラウンド」

「第一投擲部隊、放て！続いて第二第三部隊、前へ！」
号令と共に投げられる槍（恐らく本物）。狙いは多分、俺。

「第一投擲部隊は第四捕獲部隊と合流し、目標を追え！第二投擲部隊は十秒後に投げろ！」

ほんつと、何でこんな事になってるんだろーなあ。

……俺、何か悪いことしたっけ？

「独立抹殺部隊、目標を殺れー！」
殺られてたまるかつつの。

そのまま数分走ると、中央校舎が見えてきた。

確かあそこには美術室や図書室、音楽室があったはず。

あそこで隠れるか。

更に走ること数秒。

入り口に到着した。すぐに中に入り、隠れる時間を稼ぐために鍵を閉める。

「さて……どこに隠れるかな……」

三階の図書室でいいか。

階段を上り、三階へ。

「うおおっ……」

凄い。凄すぎる。

何が凄いかって言うと本の数だ。

壁一面に本棚があつて、それが天井まで続いている。

……それ以前に、この階だけ二階分使ってないか？広すぎだろ、三階。

…おっと、今はそれよりも隠れる場所を探さなきゃな。

部屋の奥の方に、三階の二階に上るための梯子を見つけた。

俺は梯子を上った。

「……………珍しいわね」

上っている途中、声をかけられた。誰だ？

とりあえず梯子を上りきる。そして声のした方へ向いて聞く。

「誰かいるんですか？」

「いるわ。ここに」

声の本人は二階の一番奥にいた。

「貴方は…今、逃げている人ね」

「そうです。そういう貴女は…追っ手ですか？」

追っ手ならすぐに逃げなきゃな。

俺は何時でも逃げられるように身構える。

「違っわ、私はただの本好きの女。今の賭け事には参加してはいるけれど」

「参加してるんですか…」

「ええ。客観的に見ても貴方は不利。だから夜波さん側ではあるけれど、参加しているわ。……………まあ、私は教室にいても煙たがられるだけだから行つてない。だから貴方の追っ手ではないわ」

「教室に行つてないって…授業にも出てないんですか？」

バアアン！

…げ、来やがった。

「すいません、僕は隠れるんで、ここにいないことは言わないで貰えませんか？」

「いいわよ。ひとつ貸しになるけど」

「分かりました。その借りはそのうち返します」

「ふふふ…。交渉成立ね」

はあ…一体何を要求されることやら…。
とりあえずどこかに隠れなきゃ。

「隠れるならこっちよ。来なさい」

「はあ…分かりました」

俺は奥へと進む。そこでやっと声の本人、女性の顔を見た。

「…で、どこへ隠れればいいんですか？」

「ふふ…机の下よ」

机の……下？

待てマテまで。この人は女性だ。机の下なんか隠れたらそれこそスカートの中とか…色々見えちゃいますよ！？

「…それは色々まずいのでは」

「なら捕まっちゃうわね。確実に」

「…それも嫌です」

「ほらほら、もうすぐそこまで来てるわよ？」

「くっ…。…隠れます…」

「ふふふ…最初からそうすればいいのに」

落ち着け…落ち着け…落ち着け…。

理性で本能を抑える。

今俺は誰もいない所で一人で隠れているんだ…。

物音がしなくなるまで目を閉じて動くなよ、俺。

「今日は暑いわね…」

モゾモゾと何かが動く。

本能が言う、『見たい』と。理性は言う、『駄目だ』と。

俺は理性で本能を殺し、目を閉じたままにする。

「よし！ここで最後だ！探せええ！」

何人かの追っ手が入ってきた。

よし、早く諦めて出てけ。そうすりゃこの生き地獄から開放される！

~~~~~

本能（本当に開放されたいのかい？こんなチャンス、二度とねえぜ？）

本体……そ…そうだが…

本能（チラツとなら大丈夫だ！事故って言い張ればいい！）

本体……………そうか…大丈夫なのか？

理性（駄目だ！それは名も知らぬ彼女に失礼だ！）

本能（てめえは引っ込んでろ！）

理性（黙れ！）

本能（！！？）

理性（そして聞け！我は理性、人の良識。そして…本能を断つ剣なり！）

本能（ちょ…）

理性（咆える斬 刀！届け！雲耀の速さまで！）

本能（待て待てま…）

理性（雲耀の太刀！その身でしかと受け止めよっ！）

本能（やめろおおお！）

理性（チエストオオオオオオオオ！！）

本能（ぎゃあああ！！）

理性（我が斬 刀に、断てぬ物無し。）

~~~~~

「ここにもいない…。違う校舎だ！皆、行くぞ！」

俺の中の本能が理性によつて一方的にやられた直後、追っ手の方々は図書室を去っていった。

そして俺も机の下から転がり出る。

「……………はあ、助かった」

ほんと、色んな意味で。

「良かったわね」

「ええ、助かりました」

「それより…見たでしょ？」

「見てません。俺の中の理性が本能を抑えきりました」

「本当かしら？」

「本当です。…それより、何でこの二階部分に来なかったんでしょね」

謎だ。あんなに見つけやすい場所に梯子あんのに何で来ないんだろ
う。

「簡単な事よ。ここには私がいるもの」

「……………はい？」

「……………どういうことだ？」

「私がいるから、彼らはここに上がってこなかった。そういうこと
よ」

えー…それってつまり、

「僕は机の下に入らなくても良かったんじゃない？」

「ええ、そうよ」

……………。

「貴女の相手をするのは精神的に疲れます。もう行きます」

「あら、残念」

何に残念だよ、何に。俺を弄ることかこのやるー。

「今日の事は貸しよ。いつか返して貰うわ」

「はいはい、分かりました。それでは」

さあて、後一時間弱…どうするかね。

結論からして言うところ。

一時間という休息でスタミナを全快させた先輩が謎の先輩（である
う人。仮面付き。女性）を連れて俺を追ってるんだよね、これが
しかも謎の先輩は普通に俺について来てるし。一体何者？
まあぶっちゃけ本気の俺は風を超えられるけどな。

「先ばーい。その仮面の怪しい女性はどなたですか？」

「ふっふっふ…、秘密兵器だ。そして後輩にも関係のある人物だ」

俺に関係のある女性？

……………誰？お袋？

お袋だったらずいなー、確実に捕まえられて先輩に差し出されち

やうよ。

「何をぶつぶつ言っている、後輩」

「あれ？声出てました？」

「バツチリ」

うーむ、いかん。直さねば。

「そろそろ諦めてくれませんかねー」

「嫌だ。【ピ】して【ピ】にしてやる。その後ゆっくりと教育しなおして……くっくっく」

うーわー、凄え黒い笑みだよ。

捕まったら何される事やら。

「待て。その際には【ピ】もするべきだ」

仮面の人おおお！？何をアドバイスしちゃってんのおおお！

「それもいいな。……まずは捕まえよう」

「そうだな」

これ以降は無言になる先輩方二人。

心なしか速くなってるような気がする。

「速さで勝てると思わないで下さいよ、先輩」

俺も若干スピードを上げる。

後は持久戦。

（二十分後）

「……はっ……はっ……はっ」

「ん？どうした、秘密兵器」

「……はっ……風菜………これさ……はあっ……はっ」

お、やっと脱落か？脱落してくれると嬉しいなあ。

「息しづらいんだよおおおお！！」

おー、仮面を……投げ捨てたあ！？

ん…なんだろう？謎の先輩の顔に見覚えが……。

「お袋？」

「違うぞ、後輩。戸籍上、後輩の『姉』だ」

「そういうことだ」

「何いいいいいい！？」

そうか、お袋の血を受け継いでるから俺について来れたのか。

なるほど、でも特訓はされてないみたいだ。特訓されてたらすぐに捕まっちゃうもんな、俺。

…あれ？

「俺って家族からも【ピ】されかけてる？」

「どうなんだ？漣」

「……………／／／／／／／／／／／／」

顔を赤らめて頷きやがった。

「……………近親相姦じゃん」

「愛にはそんなもの関係ないんだよ、後輩」

「そういうことだ、弟」

先輩方は更にスピードを上げてくる。

俺も上げる。捕まりたくないから。

『ピンポンパンポン。影月君にボーナスタイムじゃ。今から残り三十分まで、相手を気絶させる程度になら手を出してもいいぞ。ただし、夜波君には触れた瞬間にアウトじゃ。それじゃ、五分間、頑張るように。おーい、教頭ーお茶淹れてー』

なにになに？ボーナスタイムだとう？

先輩には触っちゃ駄目だけど、姉らしき人になら触れてもいいのか。ラッキー。チャンスじゃん。

「そういうことらしいので覚悟してくださいね。自称姉貴さん？」
「自称じゃない」

走っている方向を前から後ろへ180 変える。…あ、読者の皆さんは真似するなよ？足首捻るから。

「先輩、後は頼みました」

一気に近づき、自称姉の首に手刀を喰らわせる。

俺は親父に教えてもらった事があるからこれで人を気絶させるくらいはできる。

「え？…っておい！漣！？どうした！？」

「気絶させただけですよー」

先輩から離れながら一応伝えておく。

さあて…散々追いかけてくれやがった生徒達、今すぐ反撃してやるから待ってろよ。

グラウンドで会議をしていた生徒たちが全員気を失ったのはボーナスタイムに入って二分後のことである。

『終了』。皆の者、お疲れじゃ。追いかける役じゃない人も中継を見れたはずじゃ』

終わったあゝ。

長い鬼ごっこだったぜ。

『恒例の結果発表じゃ。えゝ…今回の賭け、当たった者は一人じゃ。一年三組Bの筒井見。それと逃げ切った影月君は一年校舎入り口で箱から棒を取るのじゃ。外れた諸君にはポケットティッシュをプレゼント。それじゃ、今回のイベントはここまで、全校生徒はすぐに教室へ戻ること』

見の奴俺に賭けてたのか。
だったらいつものテレパシーっぽいのでサポートしてくれりゃ良かったのに。

「おゝい、狼」

「見か。何の用？」

「報酬貰いに行こうぜ」

「分かった。今行く」

「それにしてもさ、お前よく逃げ切ったな」

「んゝ家庭事情で体力はあるんだ」

「どんな家庭だよ、それ」

「そんな家庭さ」

どんな家庭だったかは皆様のご想像に任せます。
いつか公開するけど。

「お、あつたぞ」

見が走ってく。

俺もそれを追って行く。

「今回は何が当たる事やら……」

魔剣はもういららないな。実用性皆無だし。

「よし…これだっ！」

見が棒を一本引き抜く。

「じゃ僕はこれでいいや」

ノリで特に何も考えずに右奥から三本目を抜いてみた。
どれどれ…今回は何かな…と…

『魔剣 グラム』

.....。

「見、何も言わずに交換してくれないかな？」

「やだ」

「お願い。今回もあれだから」

「やだ」

「変・え・て」

「い・や・だ」

「…ハア」

「じゃ、俺は教室に戻る！」

溜息ついた瞬間に逃げやがった。

……俺も戻るか。

この後、チョークが飛んできたのは言うまでもないこと。

エピソード7 全校VS俺！？～後編～（後書き）

突然ですが、愛用のパソコンが逝ってしまいました。

そのため、更新が遅れてしまいました。

待っていてくださった方（いるのかな？）すいませんでした。

次回からはまた早めに更新していきますので、ご安心を。

こういうのをやってほしい…っていうのがありましたら、感想でも何でもいいので教えてください。

エピソード8 体育！

全校生徒（見以外）との戦いからはや一週間。一年生の中ではある噂が流れていた……。それは、美少女の転校生が来る、という噂。

……………まあ別にどうでもいいんだけどね。

それよりも今はあれだ。

とうとう来てしまったのだ。体育の授業が。

先日、2組（AB合同）が体育の授業に当たっていた。

しかし、あまりのきつさで生徒たちは皆、授業終了まで持たなかったとか。

くグラウンドく

「ねえ狼くん。一体何をやるのかな？」

俺に話しかけてきたのは奈々村さん。

あまり出番がない人。

【こら、影薄いとか言うな】

だったらもっと出してやれよ作者。

【ん…まあそのうちね…】

口笛吹きながらどっか行きやがった。

逃げたなあ野郎。

「何をするんだろうね」

「相当きついらしいな」

「あれ？見、いたの？」

「今着替え終わって来た所だ」

「見くん、そんなにきつい授業なの？」

「ああ。何でも2組の連中が授業終わりまでもたなかったか」

「ええ。私耐え切れるかなあ…」

俺も耐えられるかなあ…でもお袋の特訓の方がきついだろっから大丈夫か。

「おーし！授業始めるぞー！全員整列ー！」

「お、3組は整列速いな。俺の名はキャプテンブラ…」

「先生！それ以上は危ないと思います」

いよし見！ナイスツツコミ！

「悪い悪い。俺は岩石だ。^{いわいし} 体育の授業を担当している」

うーん…名は体を現す…だっけ？

あれの通り、岩石先生の体は岩石みたいだ。

二メートルくらいの身長、筋骨隆々な肉体、日焼けして真っ黒な肌。

そしてなんと！歯がありえないほど白い！新庄選手並の白さだ。

…まあそれはおいといて。

「自己紹介はここまでだ。さあ授業だ！」

性格は熱血漢みたいだ。

「まずは基礎体力を調べる！この先に一周一キロのコースを用意した！そこをまずは…五周でいいか。二十分で五週して来い！」

一周4分か。どうとでもなるな。

たいしてきつくもないし。

「狼さん？何をそんな余裕そうな顔をしてるんですかい？」

見？喋り方がおかしいぞ？

「楽じゃない？たった五キロだし」

「たった…？」

「うん、たったの五キロ」

「…そういや前回家庭の事情で…」とか言ってたもんなお前」
「すごいねえ、狼くん。私なんか全然体力ないのに」
「ほらその三人！早く並べ！始めるぞ！」

「行くぞー！位置についてー、用意ー」

掛け声がかかる。それと同時に全員が走る準備をする。
勿論、俺も。

「スタート！」

パアアン！！

開始の音とともに全員が走り出す。

皆、一秒でも早く終わらせたいんだろう。

…何故ならこの授業、学園の規則で罰ゲーム方式が採用されているからな。

そう、つい三分程前、岩石が言ったんだよ。

「一秒でも遅れたらその時点で罰ゲームだ！それからは30秒ごとに罰が厳しくなっていくぞ！」

「前は2組全員が目標に間に合わなかったから罰ゲーム出したんだが」

「全員すぐに倒れた。まったく、最近の奴らは貧弱だ！」

とのことだ。だから皆真面目に走ってるんだよ。

ちなみに、同じ罰ゲームでもゴールした順位によって変わるらしい。よって、皆かなりのスピードを出している。罰を受けたくない一心で。

〈十分後〉

十分が経った。目標では2・5キロは走ってないと間に合わない。俺と見は十分間に合うけど。

「皆必死だねえ、見」

「そう…だな」

「奈々村さんは余裕っぽいけどね」

「ああ…きつくなってきた…」

「体力ないね」

「お前と…話してるからだよっ」

「だったら聞き流せばいいじゃん」

「ああ…そうする」

見は走ることに集中した。

…と、なると。暇だな。

さっさと走るか。

「見。僕もう退屈だからもう終わらせるね」

「…はっ…はっ」

「じゃあね」

膝に力を入れて、一気にコースの脇にある木に向かって跳ぶ。

そして、その木から次の木や物にへと跳んでいく。

多分、見には俺が消えたように見えただろうな。

一分経ったくらいで四週目まで終わった。

後は一週だ。

軽すぎる。5キロなんて。

残りはゆっくり走るか。

周りにはれないように気をつけながら下に下りる。

そしてそのまま走る。

……………お？あれは見だな。

「おゝい見、後何週？」

「後…ハッハッ…二週だよ」

「へえ。まあ頑張ってるね」

「ゴール、と」

軽い軽い。たったの5キロだしな。

「影月！速いなお前！タイムは12分だ！」

ストップウォッチを片手に近づいてくる岩石。

「それにしてもお前、何でそんなに運動出来るんだ？」

何でって…お袋のせい？

説明するのは面倒だからやっぱりここは、

「家庭の事情です」

で終わらせる。

「そうか。それよりも、俺の授業だけは真面目に受けるよ？」

「適度にサボります」

「はっはっは。教師の前でサボリ宣言か」

「はい。サボりますとも」

「はっは、でも気をつけるよ？二年のトップクラスの夜波がな『打倒後輩！』とか言ってる最近努力してるからな」

「…マジっすか？」

「ああ。…そろそろ皆走り終えて戻ってくる頃だな。じゃ、罰を考えるから俺は行く」

「はい、分かりました」

夜波にやられない様に気をつけるよ、と言いつつ、ゴール辺りに向かって歩いていく。

…さて、どうしようか。

やることも無いしなあ。

…あ、見がゴールした。

ん？先生が何か言ってるな…。

ちくしょおおおお！！、と言に残しまた走っていった。
なるほど、罰ね。大方もう1セット走って来いとかそんな感じだろう。

…頑張れよー、見。

その他にも走り終えた奴らが戻ってきたが先生が何かを言うつとすぐに走っていった。

奈々村も戻ってきた。

奈々村も罰かなー。何て考えてたけど、何もしないでこっちに来た。

「奈々村さん、罰は？」

「女子は25分以内ならOKなの」

「そうなんだ。じゃあ楽だね」

あゝ、それにしても…退屈だ。

授業の後クラスの人達に、皆さんお疲れだねゝ、って言ったら地味な嫌がらせ（シャー芯飛ばすあれ）を一部の女子（罰を受けずに済んだ人達）を除いた人達にやられた。

エピソード8 体育！（後書き）

ども…時期外れな風邪を引いた神羅です…

次話では…狼くんの知り合いが出ます…お楽しみに…（あゝ…風邪
ってキツイ…）

エピソード9 転校生がやってきた

〔昼休み 1 - 3 B〕

「おい皆あ！転校生が来たぞ！」

「男か！？美女か！？」

「男と女一人ずつだ！かなりの美女らしい！」

「「「うおおおおおおおおおおお！！！！」」」

「ちよつと皆！男子の方もかつこいいらしいわよ！」

「それって本当！？」

「そうらしいわ！」

「「「きやあああああああ！！！！」」」

……………つるせえなあ。昼飯くらいゆつくり食わせる。

あ、ども。見です。

どうやら先週から噂されてた転校生とやらが来たらしい。

何で転校生でそんなに騒ぐかなあ、とは思っけど一度は見てみたいなあと思う。

うゝん…人のこと言えんな、俺。

…と言うことで、今は昼休みだから見に行くか。

〔昼休み 1 - 7 A〕

おゝ…やってるやってる。

…ん？何をやってるか？

それはな、『質問攻め』だよ。

例えばあれだ、誕生日はいつ？とか、特技は？とか。そんな感じ。

んで、もう一つ。

ファンクラブ

早速非公認F・Cを作ってる。

お、あそこにアイコンタクトで会話してる奴がいるから解読してみようか。

（ええい！会員ナンバー01は俺だ！）

（違う！ナンバー01は俺にこそ相応しい！そもそも始めに天さんの素晴らしさに気づいたのは俺だ！）

（……お前とは一度、戦わねばならんようだな）

（いいだろう…かかって来い！）

（待てよ！ナンバーなんて関係ないだろ！？俺たちは一人の人を守る為に集まった同士じゃないか！）

（！…そうか。そうだよな。だが、それに気づかせてくれた貴方こそナンバー01に相応しいっ！）

（そうだな…。さあナンバー01、俺たちに指令を！）

（…。まずは会員を集めるぞ！）

（（イエッサー！））

（そして集めた奴らの中から選りすぐりのメンバーを…）

…まあ、ここまでにしておこうか。うん。

それにしても見えないな…転校生。

まあいいや。めんどいし時間も無いから帰る。

〈5限 歴史〉

「…この政策の事を…」

おいゝす。

狼だ。さっきまで前に見つけない場所（エピソード5参照）で寝てたんよ。

適度にサボり、適度に授業に出る。それが俺だからな。

ヒュカツ！

「む、矢文？拙者宛か…どれ…」

矢尻に付いていた紙を広げて読み始める先生。
てか何故に矢文？

「今から強制の職員会議が入った。よって今日はここまで。後は自習とする」

自習か…ラッキーだ。

「おい狼、転校生の事知ってるか？」

「いや？転校生なんて来たの？」

「ああ、7-Aに二人。片方は女で片方は男、女の方は天って書くらしい。何て読むのかは知らんけどな」

「へえ、でもよほどの事がない限り関わる事にはならないでしょ。

この学校人数多いし」

「そうだな」

「それよりも先輩方と生徒会の勧誘以外に面倒事を増やしたくはな

……」

「いたあああああああ！！！！！」

「うおっ！あぶなっ！」

「は？」

ドオオン！

「げふあっ！？」

…っふー。

あぶねーあぶねー。

まさに間一髪って所だった。

何があつたかつて？

転校生と思われる生徒二人組みの男の方が

叫びながら凄まじいスピードで突っ込んで来たんだよ。

で、今は…。

飛び込みが直撃した狼がそのまま吹っ飛んで

椅子とか机とかぶつとばしながら壁に激突。

そのまま軽く意識飛んで（死んだか？）俺の視点に…

「ならないよ」

「うおっ！？生きとる！？」

生きとる！？ってひでえな…。

こんなんじゃ死んでたまるかよ…。

…っ！かなんだ？この抱きついて来る意味の分からん奴は…。

現在進行形で頬擦りまでしてくるし…。

「うつわああ！影ちゃん久しぶり！」

「……影ちゃん……？」

……影ちゃん？

何だ？何か前に呼ばれたことがあるような…。

~~~~~

只今、記憶を掘り起こしております

~~~~~

…ああ、『奴』か。って事はあいつもいるか…。
確かに懐かしい奴ではあるけど…俺にタツクル（奴は飛びついただけかもしれないが）を喰らわせた罪は……………重い！
喰らええい！必殺のお、ボディイブロオオオオ！

ベグシツ！

「…おおう…久しぶりなのにこの仕打ち…」

鳩尾に入ったか、力が抜け、倒れそうになる奴。

「あつれえ？おつかしいなあ。確かあの時、『博士号の二つや三つ取って来るからね！』とか言った奴が何でここにいるのかなあ？」

だが俺は甘くない。

倒れそうになった奴の頭を掴み、上に放り投げる。

そして……………

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラア！」

「いたたたたた…ちょ…やめ…」

持ち前のスピードを活かし、ラッシュラッシュラッシュラッシュ！

ある程度殴ったら…強めに上に殴り、高く飛ばす。

んでもって……………

「オラア！」

その場で二回転し、後ろ回し蹴りで吹っ飛ばす。

「又ヒヨオオ！」

「ああ、スツキリした」

「もつとやっても良かったのに」

近くから不満そうな声が聞こえてきた。

「この声は…天か。^{あめ}おう、久しぶり」

「やあやあ狼くん、お久し」

言いながら抱きついて来る天。

天も抱きついてくるとは…予想外だぜ。

「あゝはいはい、とりあえず離れろ」

「やだよ。十年くらいぶりだもん」

そう言つて力を強くする天。

とりあえず放つておくか。

「おゝい狼、感動の（？）再開はいいとして後ろの連中はご不満のようだが？」

『さあ影月狼！説明をしてみらおうか！』

「誰だ？お前ら」

ファンクラブ

『我等！天様F・C！さあ、貴様と天様の関係を教えて貰おうか！』

「関係つてそんなたいした関係じゃあな…」

「肉体関係…」

……ん？

何か今ものっそい爆弾発言しなかった？

『はあああああ！？』

「いやいやいや！違う！俺と天はそんな関係じゃない！第一ずっとアメリカに居た天とどうやって肉体関係になるんだよ！？」

『影月狼：貴様はこの世から屠らねばならんようだな…』

「だから違つて言ってるだろ！」

「奴を囲めえ！皆あ、殺るぞ！」 偉そうな奴その1

『おおおおおおお！』

てめーらちよつとは人の話を聞けええええ！

『ぐわああああ！？』

「何事だ！？」 偉そうな奴その2

『な…何者かがFC会員を蹴散らしながら突き進んできます！』

「ここで皆を失うわけにはいかない…」 偉そうな奴その3

「全員散れ！ここで戦力を消耗しても意味がない！後日再びあの場所でおう！同志たちよ！」 その1

『了解！再び、あの場所で！』

そう言い残し、凄い速さで散ってゆくFC会員達。
その奥からは見慣れた人物が現れた。

「後輩？私という女がいながら他の女と肉体関係になっているというのは真実か？」
ほんとう

とてつもなく黒いオーラを纏いながら、現れた。

エピソード9 転校生がやってきた (後書き)

暫く更新できずに申し訳ありませんでした

エピソード10 転校生がやってきた 〵後編〵

「ほんとう 真実なのか？」

とっても黒いオーラを纏いながら先輩が聞いてきた。
アッハッハ（泣）、どうしよう。

A 逃げる

B ラン&アウェイ

C エスケープ

うわぁ…。

咄嗟に頭に浮かんだ選択肢が逃げることしかないのが自分でも悲しくなってくる…。

まあいい、とりあえず逃げなきゃ。

78

「どうなんだ？ 狼」

入り口は先輩がいるしなぁ…でも窓は閉まってて開けてる間に捕まるだろうしなぁ…。

覚悟を決めて正面突破しかないか。…見を生贄にして。

「おゝい狼？ …ん？ 何か嫌な予感が…」

「すまん見！ 俺の為の生贄になれ！」

言つと俺は素早く見の足を払った。

「うおっ！？」

バランスを崩して転ぶ見。すかさず持ち上げ先輩に投げる！

「おわぁぁぁぁ！」

「！？」

その見の後ろに隠れながら俺も先輩に近づく。

「クッ！」

先輩が見を受け止める。
その隙を突き、一気に脱出！

「待て後輩！」

「前にも言つたる！待てと言われて待つ奴はいないって！」

HAHAHA！脱出完了！

さて、脱出にも成功した事だし、天と奴の説明でも。

奴こと、片翼かたつば翼つば（男）と片翼かたつば天あめ（女）は二卵性だったか一卵性
だかは忘れたけど双子。

それで俺の幼馴染…いや、幼稚園の年長の時に翼の親父おやっさんがアメリカに引越して別れたつきりだから昔馴染か？まあどっちでもいいや。

で、親父さんとその奥さんが俺ん家のお袋と親父の大親友だそうでお袋と親父さんは会う度に互いがどれ程強くなったかを確かめるために戦闘、俺の親父とおばさん（本人の前でおばさんと言うと地獄を見る。いや、マジで）は互いの研究成果を報告しあい（二人とも理系）、報告しあった物に互いの意見を加えながら怪しい薬品を作つて俺だけに投与する。（翼と天には投与しない）

…いやあ、よく生きてたなあ俺…あんな劇物投与されて。

（投与された後は大変だった…何が起こったかは皆様のご想像にお任せしますby作者）

…ちなみに、翼は片翼流かたよくという武術を親父さんに叩き込まれている。
…更に豆知識。影月流は速さ重視の流派で片翼流は力重視の流派。

身長とか外見はまた後でな。

次回に良く見てから説明するから。

「今してくれよ」

「おー…おお!?」

「よう」

「何でお前がいるんだよ!」

「でりゃあ!、と一発顔に拳を。」

「お…おふう…鼻が…。で、何でいるかって言われたら、面白そうだから!」

「死ねえい!」

「おつとお!俺はMじゃないから遠慮するぜ!」

並走しながらの俺の拳を跳んで避けながら言う翼。

何か避けられたことがすげーショックだ…。

「てか面白そうって何だボケエエ!こっちは色々と危機なんだよ!何かもう色々と!」

「へー、お前はお前で大変そうだな。それよりも言いたかったんだが十年ぶりだったのに幼馴染の扱い酷くね?」

「それは幼馴染じゃなくてももう昔馴染みの領域だろ…」

「いーじゃんいーじゃん、それに幼馴染の女子と違って萌えないか?」

…知らん。

「てーか昔馴染の女子とか言つと何かエロくね?」

…どうでもいいわそんなこと。

「おいおい、何か言えつて。それともアレか?無視か?シカトですか?シカトなんですか?」

シカトしちゃうんですか?…と、にやけながら近づいてくる翼。

そろそろムカついて来たんで黙らせるとしよう。

「あの時の写真、持ってるんだけどな」

「うげっ……」

「親父さんに見せちゃってもいいんだけどな」

「すいません狼さん。どうかお許しを」

軽く脅したらジャンピング土下座で俺の前に着地する翼。

躓いて転んだらどうする！

「邪魔だ！どけ！…で、こら！何しがみ付いてやがる！キモいんだよ！写真は渡さねえからな！」

写真ー！離せー！

と、不毛な争いを続けること数分、後ろから先輩が現れた。

「クツクツクツクツ。誰だか分かんが後輩を捕まえるとは中々やるな」

「ほら見る！お前が離さないから追いつかれただろ！」

先輩が一步近づいた。

「さあ」

また一步近づく。

「覚悟は」

更に一步。

「出来たか」

もう一步。

「後輩？」

先輩は、にやり、と笑った。

やつべえ超怖え、生きてられるかな俺。

翼！俺にしがみ付いて震えるくらいだったらどっかいけアホ！

って、うわあああ！？来たアあああ！

「キシヤアアアアアア！！」

奇声を上げながら飛び掛ってくる先輩。勿論翼にがっちり掴まれて
いる俺は動けない。

「…あ、終わったな、俺」

ガシッ

「おらてめーらそこまでだ」

予想外の援軍！？

真紅先生最高！

「む…血飛沫先生か…仕方ない、諦めよう」

んむ？血飛沫先生？

「おいこら、誰が血飛沫だ誰が。俺は飛沫だっつの」

「あれ？真紅先生じゃないんですか？それと先輩、猫かぶりは？」

「後輩を追っかけてる時にいろんな奴に見られたからもうどうでも
いい」

「真紅は弟。俺は飛沫だ。鮮血せんけつしぶき飛沫」

真紅先生って兄弟いたのね。知らなかった。

「…か鮮血が苗字で飛沫が名前って凶悪な名前だな。」

「ほーら、行くぞ夜波。まだ提出してない課題とかその他諸々の提
出物が溜まってから」

「むう…あと少しだったのに…」

先輩の後ろ襟を掴んでズールズールと引っ張っていく血飛沫先生。

…よし、いざとなったら血飛沫先生に頼るか。

「あー、その…影月だっけ？厄介事持ち込んだら真紅と二人でチヨーク投げ協力奥義食らわせるからな」

「ん、分かった」

「お？いきなり態度が変わったじゃねーか。どうした？」

「いや、先輩が猫かぶりしないんなら別に俺もしなくてもいいかと思っただけだ」

「素のまんま話せるのは楽だぞ？後輩」

「そーだな」

「そうそう、あの女とお前がそんな関係では無いことくらい分かってるからな。ただ悪ノリしただけだ」

「だったらあんな顔で追って来んな。誰でも逃げるわ」

「成る程、私の演技力も中々の物と言うことか」

あ、廊下曲がって見えなくなった。

「さて…と」

俺は自分の体に纏わり付いている翼に目をやる。

「ひっ！な…なんだ？」

「とりあえず…ぶっ飛ばしてやろうかと思っただけだ」

この後、1・2年塔に男子生徒の悲鳴が響いたのは言うまでも無いことだ。

エピソード10 転校生がやってきた　　～後編～（後書き）

作　ええ～…はい、すいません…はい、連載再開です。私用で執筆の時間が取れませんでした。待っていてくれた方（もしいたら、ですが）すいませんでした。

狼　よし、とりあえず逝ってこいや。な？駄作者。

作　嫌だ、死にたくないわ。

執筆の時間が取れた時に、感想を軽く見てみたら一件ありました。狂喜乱舞しましたとも。ええ。冥様、本当にありがとうございます。た。

狼　こんな小説に感想を送ってくれて、ありがとうな。

作　では、今後は特に用事も無いのでまったりと更新していきます。それでは、今後ともこの小説を宜しくお願いします。

エピソード11 翼の親父もやってきた

…ふう、今日は無駄に疲れたぜ。さつさと家に入って寛ごう。

学校で翼をボコった後、普通に授業を受けてやっと我が家へと帰ってきた。

普通に…じゃなかったか。

ボコった筈なのに何故か復活して色々と仕掛けてくるもんだから無駄に疲れた。

家の前に着陸し、家の鍵を取り出す。

そして、玄関に鍵を入れる所で気が付いた。

「…開いてる」

何でだ？

この家の鍵を持つてるのは俺とお袋と親父と翼の親父おやっさんだけの筈だ。

…！まさか、帰ってきたのか？

ガチャ

「おや、お帰りなさい。息子」

そのまさかだったあああああああああ！
ちくしょおおおお！また何か盛られるうう！

「あ…ああ。ただいま、親父」

「そんなあからさまに嫌そうな顔しないで下さいよ。それじゃ僕は買い物に行ってきます」

良かった、外出か。

…ってまでよ？今、買い物って言ったよな？

「待て！何を買った？親父」

「あははっ、普通の食材ですよ。気にしないで下さい」
「そうか…なら、いい」

親父は嘘は吐かないからな。言葉巧みに騙す事はあってもな。
普通の…って…たし問題ないだろう。

問題は…お袋だ。

あの人は俺の手に負えない。

……逝くしか、無いか。

俺は覚悟を決めて魔窟^{わがや}に入った。

…え？上の文字が違わないかって？いや…あってる。逝くんだ。そして魔窟^{わがや}だ。

「ただいま」

「お…う息子…、おかえり」

そして無言で自分の部屋に直行しようとする俺。

しかし、その行動は無駄に終わった。

ええ、捕まりましたとも。

「息子よ、何処へ行くんだ？」

「いやあ…俺、学生だから勉強しようかな…って」

「必要無いだろ？さあ特訓だ」

「嫌だ！死ぬ！死んじゃう！」

「ハハハハハ！」

「笑うな！」

「アハハハハ！」

「離せ！あと笑うな！」

「行くぞ」

急に真面目な声になり、更には頭を片手（それも利き手じゃない右手で）で軽く掴まれ、空中にプラインと持ち上げられてしまった。

「行くよな？」

…頭を握る力が段々強くなっていく。

「……はい」

と、言うわけで、お袋が帰って来る度に行われる特訓（しゅく）が今回も行われることになった。…はあ…。

「はあ？」

「だから、轟から提案されてな。『たまには翼と狼を入れ替えて特訓してみないか？』って」

「で？」

「轟にしごかれとけ」

「ふざけんなあ！あの力で殴られたら…」「じゃ」「……野郎…」

文句言ってる間に行きやがった…。
後で親父の薬を飯に盛ってやる…。

「あれ？翠は？」

「どうも親父さん、早かったですね。お袋はついさっき行きましたよ？」

ちなみに翠とはお袋の名前である。影月翠^{すい}。

「遅かったか。俺帰った時翼生きてるか？」

「黒い昆虫並にしぶといから大丈夫だと思いますよ？」

「そうか。よし、じゃさつさと始めるか」

始めますか…と返事をして家に入ろうとした時、親父が帰ってきた。

「おや？轟じゃないですか。どうしました？」

「おお、狂也か。ちょうどいいあの部屋のパスワードって何だ？」

「ああ、いつも貴方がハニーと戦うあの部屋ですか。」僕は殺しが
だあい好きい ”ですよ？」

「何その恐ろしいパスワード！」

「嘘ですよ？」

「で？本当のパスワードは？」

「誰のでもいいですから血液を15リットル程です」

「もつと怖えよ！」

「冗談はさて置いて…」

「冗談かよ！」

「部屋の前まで行ってください。後は遠隔操作で鍵を開けますから」

こうして、俺と親父さんの初特訓が始まった。

数時間が経ちましたとさ

何とか…乗り切ったぜ…。

けどその代償に体のあちこちが痛てーぜ。

「あつはつは。轟、上手い具合に手加減できてますねえ。僕のハニ―だったら毎回骨の何本かは逝ってるんですけど。それじゃ息子、今から薬塗りますよ」。打ち身と掠り傷に良く効く薬です。…あ、これ食べれるんですよ？どうです？」

「いるかつ！」

「そうですか。えゝい」

ベトオツ!!!

えゝい、の掛け声と共に何かが俺の背中に落ちた。
つーか果てしなく気色悪い。…ん？

「くあああつ！痛てててて！沁みる！ちよ、痛た！何これ！？」

「良薬は口に苦し、と言うじゃないですか。それと同じです。……多分」

「多分っ！？」

「狂也、実験はしたのか？」

「フウオオオオオオオオオ！」

「いいえ？してませんよ？」

「やっぱりか…。スマンな、狼。我慢してくれ」

「はあっ…はあっ…もう痛くないですよ、親父さん。それよりも見てくださいよ、これ」

「ん？どれどれ…。うお…こいつは凄こいな」

痛みが引いたと思つて傷を見ると、傷が治つてゐるんじゃないや。再生してた。

…ここまで来ると自分の体でも気持ち悪いね、うん。

しかも良く聞くと、ウジウジ言つてんのよ。やばいよ、これ。

「さあさあ、そんなことは放つておいて早く行きましょう。もう少
しで晩御飯が焼きあがる頃ですから。それにハニーも今日はきっと
帰らないでしょうから轟も食べてってください」

「ああ、すまないな狂也。それじゃいただくよ」

今日の晩飯はハンバーグのようだ…。
親父のと親父さんののは。

「おい親父、これは何だ？」

「何ってハンバーグじゃないですか。形は頑張つてメカ ジラにし
てみました」

「そうか…。フンツ！」

キーン！

ナイフを持つて首を一閃してみました。

「ああっ！僕のメカ ジラーーーーー！」

「何で中身もメカなんだよ！ふざけんなっ！」

「くそっ…二号三号、行け！」

「せいやッ！」

キーンキーン！

「二号と三号はエラとジラか。上手いな、狂也」
「キン ギドラもありますよ？」

「こっちは薬のカプセルが入ってたか…油断ならん親父だ」

「こっとなつたら…きなさい、量産型ザ！」

「危ねー物をハンバーグで量産すんな！馬鹿親父！」

「はっはっはっは！そんなことに囚われていたら科学者なんてやつてられませんよ？」

「ふむ、狼。団体様のご到着だぞ？」

「うーわー！わっしやわしやいるー！」

「僕の小遣いから出したんでそれで終わりですがね。まあ遊んでたら完全自立思考ができちゃうＡＩが出来たんでそのザ はかの赤い彗星よりも１．２倍から１．５倍の強さを誇ります」

「遊びでそんな物作るな！全国の開発者さんに謝れ！」

「狂也あ、ハンバーグおかわりしていいかあー？」

「ええ、フライパンにあるのをどうぞー」

「俺にもそっちを「駄目です」「うおっ、ザ が襲ってきたっ！？」

「フッフッフ、まあ頑張れ、狼」

「危ねえっ！うわっ！」

「「あははははは」」

こうして、男３人の食事は進んでいった。

エピソード11 翼の親父もやってきた（後書き）

作 はい、この話は翼を学校でボコった後の話ですね。何せ同じ日ですし。

狼 まさか親父さんが来るとは思わなかったな。

作 いやいや。折角アメリカから帰らせたんだから出さなきゃね。

狼 だからって親父まで帰らせることは無いだろ？

作 ほらほら、そんな事はいいかからおじさん二人の紹介でもしたら？

狼 めんどくせーなあ…。

片翼轟。翼と天の父親。今現在も身長は伸びていて現在208センチ。

チ。超マッスル。そしてダンディ。

影月狂也。俺の親父。身長、大体180くらい。超絶マッドサイエ

ンティスト。メガネ。

以上だな。

作 適当だな。詳しくは説明しないの？

狼 その辺は読者皆さんに『こんな感じかなー』って考えて貰う。

作 まあ、基本的にはかつこいいので顔等は皆様の想像にお任せします。（その内髪の色等は決定します。まあ殆ど決まっていますが）
それでは、今後ともこの小説を御贖員に。

エピソード12 これって告白って奴ですか？

そう、これはとある日の放課後のことだった…

「あの、その…一目見たときから…す、好きでしたっ！良かったら付き合ってください！お願いします！」

「だってさ、良かったな、狼」

「だってさ、良かったな、見」

「だってさ、良かったな、翼」

俺は見に、見は翼に、翼は俺に、完璧に同じタイミングで名前以外のところを同時に言った。

「「「……………うん？」」」

何でこんなことになってるんだろ…。今日って何かあったっけなあ…。

〽半日前〽

「狼？どうした？返事しろ」

見が俺に話しかけている。

ああ、そうだ、今日は火曜日。

土日のお袋・親父さんの修行を無事に乗り切ったんだよなあ…。

んでもって猫かぶり無しで月曜に学校いったら皆すげー驚いてたなあ…。

「ああいや、悪い。もう、あまりの疲れで意識が違う世界へ飛んだ」

「何それ？頭大丈夫かお前？」

「うるせーな、お前よりは頭いいよ」

「…俺これでも頭いいほうなんだぞ？」

その後も喋りながら午前の授業を終え、見と二人で学食食いに行ったらそこで翼に遭遇した。

「おいゝつす、狼、見」

「狼、今何か聞こえたか？」

「空耳じゃないか？少なくとも俺には何も聞こえなかったし見えなかった」

「ちょ……」

「気味悪いな、さっさと行こう、狼」

「そうだな」

「無視ですか？放置プレイですか？」

「俺さ、最近ポイント無くなり気味だから学食やめて弁当作るうかとか考えてんだけどどうかな？」

「材料費とか出してくれるんなら俺が作らんでもないぞ」

「………しくしくしく………」

「頼みたいんだけどな……ほぼ確実にあの3人に奪われるだろうなあ……」

「ん？よく聞こえなかったぞ？」

「………グスツグスツ………」

「普通に学食でいいかな」

「そうか」

「「………あれ？翼いたの？」」

「いたよ！さつきからいたよ！」

そして昼飯ー。

俺は掛け蕎麦、見も掛け蕎麦、翼はざる蕎麦。

俺達はテーブルではなく、調理場に一番近いカウンター席で並んで食っている。

…いや、囓っている。

ズズズー、ズルツズルツ、ズゾゾー

うん。何かいいねー。

特に話すことも無いけれど、俺は今のこういう状況好きだぜ。周りのこと気にしなくてもいいし、居心地もいいしな。

…これで、後ろで暴れている奴らさえいなけりやなー。

「狼君には私のお弁当を食べてもらおうのー！」

「いえ！私のお弁当を食べていただきますから天さんはお一人でどうぞー！」

「奈々村さんこそお一人でどうぞー！美味しくないお弁当食べて具合悪くなられたら困るから！」

「何ですかその言い方は！」

「そっちこそ何なんですか！」

ああ、うるせー。

…ってかこんなに仲悪かったのかこいつ等…。

…あ、弁当箱が飛んできた。

「ホイっと」

うん。まあ避けるよね。

わざわざ当たるのも面倒だし。

「せめてキャッチしてやったら？」

「めんどーい」

「いやめんどいってお前なあ……」

前に向き直って昼飯をまた食う。

…もう一個も飛んできたし。何で飛んでくんだよ。

「よッ」

「いやだからキャッチしてやれよ」

「それよりもいいのか？今の、厨房に飛んでいったように見えたぞ？」

「えゝ？大丈夫だ……」

「グハアッ！何だ！？弁当箱が飛んで来たぞ！？誰だあ！飯を粗末にした奴は！」

「料理長ッ！落ち着い……ちょ！包丁を投げないで下さいって！うわわわわ！」

「知ったことかー！俺は飯を粗末にする奴が大っつつ嫌いなんだあー！」

「ちよつとりヨーリチヨー！？」

「副料理長！何とかして下さい！」

「スウ……（煙草吸ってます）フウ……（煙吐き出しました）

…そうなたら俺には止められん、暴れさせとけ」

「「ええー！？」」

「ウガアーーーー！！」

「」

「」

「……」

……うん、大丈夫だ。
きつと大丈夫だ。

「アレでも大丈夫と言えるか？」

「天は既に逃げてるぞ。我が妹ながら、中々の判断力じゃないか」

「よし！ 囷作戦だ！ 翼を生贄にして俺と見が逃げる！ 以上！」

「おう、分かった！」

「おう、わかっ……ってフザケンナあー！」

「やかましいっ！ 逝って来いやあっ！」

オラアツつと蹴りを入れて厨房の方に飛ばす。

そして逃げる！

「ッ！！ 飯粗末にしたのテメーかあああ！」

「おわっ！？ 中華包丁はやめれ！ つか犯人はあそこで走ってるチビともう一人だ！ 俺じゃない！」

チビ！？ ……チビ？

チビだとお！？

「テメー誰がチビだボケこらああああ！」

振り向いて飛び蹴りを放つ。（3割くらいの力で）

「甘いわボケチビがあああ！」

見事に片手で足を掴まれちまつたぜ…。

しくじった…。

「おいおっさん、月見そば一つくれ」

「おっ飛沫の旦那！いい所に！あの逃げてる奴をとっ捕まえてくれ！この3人に俺の裁きを与えなきゃ気が済まん！」

「ああ、真紅のクラスの…名前なんだっけ？忘れた。まあいい、捕まえるから一週間飯奢れよ、おっさん」

おつよ、と料理長が言っている間に何処からかチョコクを取り出す血飛沫先生。

…なんでチョコク持ってたんの？私物？

「そらっ。…爆ぜろ」

向こうでパーン、と快音が響いた。それと同時に、見が飛んできた。

「ぐえっ」

「「あ、おかえり」」

「ククククッ！さあ、捌かれるのと卸されるのと潰されるの、どれがいいか選ばせてやろう！さあ選べ！」

「こらこらおっさん、捌くな卸すな潰すな。後処理が面倒だ、特に血痕とかな。…最近のルミノール反応薬とかマジすげーからよ。せめて雑用させるくらいで許しとけ」

心配する所そこっ！？

ルミノールとか言わないで！？

まあ、俺と翼は逃げれるんだけど見がな。

「旦那、処理なら俺がやるんで大丈夫b「待て」」

「スウ……（煙草吸ってます）フウ……（煙吐き出しました
時期的にちょうど良い頃だろう。明日明後日にはメニューが全て
中華に変わるからな。中華鍋や調味料の運搬をやらせとけ。後はま
あ、食器の片付けとかで良いだろう」

「そうっすよねえ。料理長の場合……ハッハッハッハ！秘技！
300枚卸！』とか言って、そりゃーもう人肉の生き造りみたいな
状態になるでしょーし」

「やっぱり副料理長は常識人ですね」

「スウ……（煙草を以下略）フウ……（全略）」

まあ、そういうわけだ。放課後に……ん？中華用の調理器具は何処
だったっけ？……ああ、思い出した。一・二年塔の倉庫にある筈だそ
こから道具を運んできてくれればいい。以上だ、なあ料理長？」

「……………納得いかん」

「以上だ、なあ料理長？」

「納得いk」

「以上だ、なあ料理長？」

「……分かった分かった。それでいいよ、もう」

「そういうことだ。じゃあ放課後にまた来てくれ」

そして放課後、俺達3人は厨房の前に行った。

「このメモに書いてある物を持ってくるだけだからな、頼んだ」

どれどれ……？

『雑用リスト』

中華鍋×20

中華鍋（大）×15

中華鍋（小）×25

豆板醤（大瓶）×50

コチュジャン（大瓶）×50

テンメンジャン（大瓶）×50

e t c . . . 』

「……………」

「何で無言で俺の方見んの!？」

「いやだっってお前バカじゃん」

「それと見!お前そのロープどっから出したんだよ!?!やめて怖いから!」

「三次元ポケットから出したただけだが？」

「割と普通の答えが返ってきた!？」

「ほーら行くぞー」

「お前達雑用やる気ないだろ!？」

「当たり前だ」

そんなわけで今の状態になっているわけだ、うん。
ちなみに今は倉庫の一步手前にいるわけだ。

いやホントどうなってるんだろう？

次回に続かない。

【いやいや、続きます b y 作者】

エピソード12 これって告白って奴ですか？（後書き）

作 どうもです。お久しぶりです

狼 何挨拶かましてんだこの野郎は

作 久しぶりだから？

狼 どうでもいいわ、ボケ。つーか何だよあの料理長。危なすぎる
だろ

作 うん？あの学校は時期で料理人変わるからね。個人的に副料理
長が好き

狼 ああ、あの渋いオッサンか。確かに外見もカッコよかったな。
って違う！冒頭のアレは何だ！

作 何って告白？

狼 アレはどうやって処分するんだよ！

作 君の気合で？

狼 何で疑問系なんだよ！

作 と、言うわけで次回も狼君が頑張ります。次話はわりと早めに
書けると思います

狼 精霊の方に力入れ過ぎなんだよテーマはよ

作 良いじゃん、真面目に書いてるんだから。それではまた次回！

エピソード13 告白って奴ですか？～後編～

「あー、その、その告白は誰に対してなんだ？」

見と翼の代表として俺が聞いてみた。

「み…皆さんですっ！」

いやいや、皆さんって、おい…。

（こちら狼。見、翼、伝わってるか？）

（ん、ああ、大丈夫）

（俺も大丈夫）

俺達は瞬時に会話アイ・コンタクトを始めた。

そーだな…議題は『どうするよ、これ』

（で、この状況どうするよ。あの子は俺達が好きだそうだが）

（つーか、達ってなにさ、達って）

（間違いなく俺、翼、狼の俺達だろ？）

（俺は断るけど、お前らは？）

（俺も）。達って辺りが気に入らない）

（俺もだ。今はまだそんな余裕ないしな）

（じゃ、断るか）

（任せたぜ！）

（頼んだ）

「悪いけど俺達はお断りだ。じゃ、仕事があるからそこといてくれ」
「そう…ですか…。お時間とらせてスイマセンでした」

そういうと、あの子は何処かに去って行った。

「よし、さっさと運んで帰ろうぜ」

「了解」

「運ぶのは俺だけだろ……」

「分かってるじゃん」

「お前何時か全力でぶん殴ってやる」

「ほら狼、鍵」

見からポーンってな感じで鍵が飛んできた。

俺はそれを見ないで受け取ると……

「鍵多ッ！？」

余りの鍵の多さに吃驚した。

「そこにある鍵だけで全部の鍵が開くらしいからな」

「どれが本物なんだよ」

「そんな関係ねえって。こんなもん適当に差し込め……」

ブオン、ドギヤアアンツ！！

「ば？」

俺の横から鍵を取った翼が適当に鍵を差し込んだ瞬間、鎖付きトゲ付き鉄球……いわゆる『モーニングスター』ってやつ（？）が倉庫の扉の奥から飛んできた。……あ、扉閉まった。

「適当にやるとそうなるぞ。確か本物は５８番か５９番か５７番だった気がする」

「そういつとは早く言ええええええ！」

「いや、翼だっかしいかな〜って…」

「よかねえよ!」

「とりあえずさっさとやって帰ろっぜ!」

俺は翼から鍵を取り返す。どれにしようかなー。

…これだ! 57番!

「開けえッ!」

ガチャ

開いたか!?

「そついゝん、構ええッ!」

ジャキジャキジャキジャキジャキジャキ

「撃^てーーーーー!」

ガガガガガガガガガガガガガガガガガッ!

「よっ、はっ、とりゃ、とっつ」

何か出てきて、しかも撃ってきたし。

だがまだ甘いな! 避けきつてくれる!

「クッ! 撃ち方やめー! 総員、直ちに扉を封鎖せよ! 伍長、手榴弾を投下しろ!」

「サー・イエッサー!」×7

転がってきた手榴弾を後ろに飛んで回避し、回避終了と。

「相変わらず何でもありかお前は」

「？ 弾をよく見れば誰でも出来るだろ？」

「俺の場合は全部受け止めるけどな」

「幼馴染なだけあってお前も何でもありか」

「どうでもいいけど、俺達開けたから次お前だな、見」

「そうそう、俺達だけってのも不公平だしな」

「はいはい…」

ほらよ、と鍵を見に渡して後ろに下がる。

「残りは58と59…。確立は50%か…。悩んでも駄目だ！59番で行く！」

叫んで鍵を入れる見。

その瞬間、扉が開き、

「お兄ちゃあああああああ」

「うおわあああああああああああああ！？？！！？？」

そして、すぐさま扉を閉めた。

「はあ…はあ…」

「おい、見、どつたの？」

「すー…はー…すー…はー」

「ん…翼さん、これは先程の『お兄ちゃん』発言に対して、何らかのトラウマにスイッチが入ったのではないのでしょうか」

「そうですね、狼さん。普段は冷静な見があそこまで取り乱すとは…。一体何が出てきたんでしょうねえ」

「……（ボソボソと何か呟いている）……」

「狼さん狼さん、とうとう頭抱えて体育座りし始めましたよ？」

「しかも何か呟いているようですねえ。もうこれは放置の方向で行きましょう、翼さん」

さてさて、廊下の隅っこの方で何か呟いてる見はほつといて、仕事終わらせよつと。

「おし、58番で開いたぞ。翼、出番」

「へいへい、やりやあ良いんだろやりやあ」

「スウ……フウ……」

まさか一回で全部持ってくるとは……。ご苦労様。どうだ？折角だ、何か食うか？」

場所は変わって厨房前。

荷物を全て翼に括り付けて運んできた。

余りの重さに耐えられなくて廊下に翼の足跡残してきたけど、まあそれは『え、何やってんの？』的な目で見た校長が埋めといてくれるだろ。きつと。

「早く帰りたい……」

「俺マーボー！マーボー！麻婆！あ、マーボーでも麻婆茄子の方ね！激辛激辛！いや寧ろ超辛で！」

「うるさいわボケエ！」

「ピひゃん！」

マーボーマーボーうるさいわ！

こちらら早く帰りてえんだよ！

それよりもマーボーは麻婆豆腐だろ！！（これ重要）

「ぐふう…まさかのレバーブローですか…」

「早く帰ろうぜ。飯作らないとお袋に殺されちまう」

「へ？何で？おばさんの料理、神クラスの上手さじゃなかよ。この前聞いたぞ？料理で戦争を止めたとかって」

「あの馬鹿夫婦は何やってんだよもう……」

「でもお前って確かおばさんより速かっただろ？なら大丈夫なんじゃない？」

「お袋は他人に見られてるとか気にしないから影月（かげづき）の力使いまくるんだよ。つーかお袋クラスの使い手になると一般人からは見えないしな」

「はい、お待ちどう様です。麻婆茄子、辛さレベルMAX、アルティメットエディションです」

「いいいいやつほおおおう！」

「だからうるせえッってんの！」

「ペプシッ！？」

あーもー、ほんとうるさい。

今度は後ろからぶん殴ってやった。

アルティメットエディション

この時翼の顔が麻婆茄子・究極版に突っ込んだけどまあいいか。翼だし。

「ぐうおおおお！目が！目があああ！？目に茄子がああああ！」

「喧しいっつってんだろおおお！」

「ククク…」

「副リョーリチョーが……笑った……!？」

「ッ！今お前が見た物は即刻記憶から消せ。消さないと俺がお前を

⋮
⌊

「いいいいいいいい
いいいいいいいい
あ あ あ あ あ あ
あああああああああ

!?

エピソード13 告白って奴ですか？～後編～（後書き）

作 と、言うわけで告白はさほど重要な事ではありませんでした。
狼 だったらサブタイにすんなアホ作者。

作 おや？期待してたのかな？

狼 するか。興味もないしどうでも良い。つーか最近女と関わると
ろくな目にあわないからな。

作 まあ、基本的に女性の方が強い設定だからね。

狼 最近先輩と姉貴がパワーアップしているとの噂を聞いたんだが？
作 ……！な、何のことだかさっぱりだよ。

狼 してるんだな。まあ、それはいいとしてまた次回な。

作 次回は狼君と翼が実力の片鱗を見せます。お楽しみに。

狼 文才無い＋戦闘描写下手、だからあまり期待しないよーにな。
ちなみに感想は随時受付中だぞ！

エピソード14 何か知らんが襲われた

「なあ翼」

「なんだ？」

「ここは学園の中庭。」

今日の授業も終わったし、今は翼と二人でまったりしてる所だ。ちなみにはまだトラウマ入ってる。

「俺、よく生きてられたよな」

「そついや、おばさんに国中追い掛け回されたんだっけか。お疲れ」

「あとさあ…どうでもいいけどさ」

「どつたのよ？」

「視られてるよな」

「ああ、あの木の裏に一人いるな。それに、授業中とか遊びに行っただけとお前ずつと見られてたもんな」

「うむ。つかお前、授業はちゃんと自分のクラスで受ける。毎回俺等のクラスに来るな、邪魔だし」

そう、何かよく分からんが俺、今日は誰か…つか木の裏の奴に監視されてるらしい。

「何かむかつくなあ」

「お前なら撒けるだろ」

「そうだけだよ、あいつ一般人じゃないぜ？」

「適当に相手してあしらえばいいんじゃないの？まあ頑張れや。じや、俺麻婆茄子食って帰るから」

「茄子じゃなくて豆腐だろそこは。まあいい、じゃあな」

翼は食堂に向かっていった。
茄子で食中毒になって悶え苦しむがいいわ！
さてさて。

「その人、出てきたら？」

「何だ、気付いてたのか」

「そりゃ気付くだろ。で、何の用？」

「俺は家系で陰陽師やってんだよ。で、お前からそういう氣を感じた」

「へえ、そりゃどうも」

「面倒事は嫌いなんだが、一人前になれば家の馬鹿みたいな修行も終わるからな。お前を抜って一人前として認めてもらう。そういうわけだから」

ここまで言って自称・陰陽師の男は札を取り出した。

「死んでくれ。式神！」

「はあ…話が飛び過ぎだろ」

男が式神つつった瞬間、二メートル位の傀儡人形くぐつみたいなのが手に持った刀で襲ってきた。
っていうか本物の陰陽師さんでしたか。

「よつと」

「あれを避けるか！？流石妖怪…」

ありやま、見事に勘違いしてるみたいだ。

「まあ聞けって」

「うるさい！行け、式神！」

人形が後ろから切りかかってくる。
俺はそれを体を捻るだけで避ける。

「俺は普通の人間だぞ？」

「なら何でそんな氣を持っている！？」

今度は赤い札を取り出して投げてきた。

陰陽道とか五行からして火だろう。

恐らくは…爆発か何か。

「そんなもん生まれつきとしか言いようが無いだろ」

札が近づいてくる。

その場から跳んで樹の上に乗って避ける。

「ならそのあり得ない身体能力はなんだ！？」

「あり得ないってのは失礼だな。現にありえてんだろーに」

人形が追いつき、下から突いてくる。

それも冷静に見極めて樹の幹を左右に移動することで避けきる。

「大体お前、自分が修行やりたくないだけで人殺そうとすんなって」
「黙れ！」

人の話聞けよこの野郎…。

「俺はただ自由が欲しいだけだ！あんな家なんかどうでも良い！」

「いや、そんな話俺にされてもどーしよーもないし」

「だから早くお前を抜って一人前だって認めてもらうんだ！」

懲りもせずに赤い札を投げてる。

って解説してる今も後ろで人形が切りかかってきてるんだよなあ。
真面目に解説すんのも飽きたし、終わらせるか。

「なあ、剣道の突きつて凄えよな」

「何を…」

反論してきたが無視だ。
めんどくさい。

「あの技、高校生以上の経験者にしか使っちゃいけないんだぜ？」
人形を蹴り飛ばし、距離を取る。

「そんな経験者でもたった一発で死ぬことがある、真剣でも無いのに、だ。何故か分かるか？」

十分に距離を取った辺りで人形に向き直る。

「し、知るかそんなこと！」

「こういうこと、だ」

パン！！

一瞬で距離を詰め、腕を前に突き出す。
俺がたった今突いた人形は、文字通りバラバラになった。
その破片の中の頭だった部分が札になり、その札は空中で燃え尽きた。

…ちなみに、今は影月の技じゃない。ただの突き、だ。

「なッ!？」

「あーダリー…。じゃあな陰陽師さん。俺、帰る。飯作らないといけないんで」

それにしても…今日の晩飯は何にするかねえ。
久しぶりに餃子でも作ってみるかな。

「おーい、狼おー。終わった？」

「ああ、今さつき終わらせた所。ほれ、帰るぞ」

…ん？冷蔵庫に大蒜あったっけ？

「式神！」

陰陽師さんはもう一体の人形を出して襲ってきた。
まあ、話にならんくらい弱いから関係ないか。

「何だ、駄目駄目じゃんあいつ」

「あ、翼もそう思うか？実際、弱かったし」

ベゴオオン！

あちゃー。

翼の奴、裏拳一発でやっちゃったよ。

後ろを見もしないで放った翼の裏拳が人形の顔面にHITした。
人形はきりもみ回転しながら陰陽師さんの方に飛んでいく。

「へぶう！」

あ、巻き込まれてやんのー。ばっかでー。

「おいおい、巻き込まれて気絶したぞあいつ。どうすんの？」

「放つとけば起きるって。本気でやったわけじゃないんだし」

「当たり前だ。お前が本気でやってたらあんなもん壊れて破片になる所か粉々になって霧散しちまうだろうが」

「お前だつてそーだろうに」

「俺は本気出さないの。出すような相手なんてお袋達以外には異世界にしかないだろーし」

「異世界？どこそれ」

「馬鹿作：じゃない。この世界の神が何時も読んでいる世界。何か感想はまだ送ってないらしいけど」

「読んでる？感想？送る？」

「まあ気にすんなって」

気になルうううう！

って叫んでたけどほんとこつ。
だつて翼だし。

エピソード14 何か知らんが襲われた(後書き)

狼 おい、馬鹿作者。俺剣道知らんぞ。知ってるのは突きが何故強い
か、だけだ。

作 あー、いいのいいの。突きが強いっていうイメージを読者様が
持ってくればいいな、って思ったただけだから。

狼 …にしても、あいつ弱かったなあ。

作 もう二度と出てこないしねえ。

狼 何かかわいそうだな…。もうちょっと戦っても良かったか。

作 いーのいーの。何か戦わせたくなっただけだから。

狼 だったらもっと強い奴にしてくれ。アレは弱すぎる

作 うーん…。いっそのこと賄賂贈って他の先生方に『うちの狼を
宜しく願います』って頼んであげようか？

狼 いや…。あの兄ちゃん達はちっと…。俺魔法とか氣とか使えない
し…。

作 今度機会があつたら(コメディクロスの企画は話数が少な
かったので参加してません。次があつたら参加してみたいです) お願
いしてみよう…。おっと、長くなりましたね、それでは、また次話
で会いましょう。

狼 またなあ。馬鹿作者が感想に餓え始めたから送ってやってくれ
るとパワーUPするかもな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2621e/>

学校は空の上！？

2010年10月10日17時30分発行